

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 7 7 号

特集 吉田興一さんを悼む

----- 高木和男 湯山学 田中まさ子 有田裕一 野口ゆくえ -----	1
「中屋旅館」について ----- 鈴木 三男吉 有田 裕一 -----	8
鵠沼の歴史的家屋をたずねて②	
岸田劉生の住んだ別荘	
----- 西 忠保 有田 裕一 高三 啓輔 -----	19
講演記録 鵠沼に住んだ人たち	
～ 郵便・電報を配達した日々 ----- 渋谷 良之 -----	25
「クゲヌマエンシス」と呼ばれる	
小さなエピソード ----- 伊藤 聖 -----	37
本鵠沼駅のことー私の鵠沼日記より ----- 金田 元彦 -----	41
編集後記 -----	45
鵠沼随想 ----- 関根 久雄 -----	46
「鵠沼を語る会」活動の記録 ----- 総務委員会 -----	47

『新編相模風土記稿』（天保13年、1842）に、「鵠沼村久久比奴末半良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

吉田興一さんを悼む

「鵠沼を語る会」の発足以来、会のためひたすら情熱を注がれてきた吉田興一さんが、平成10年4月4日、脳溢血のため亡くなられた。3月22日の朝方に倒れ、意識はついに戻らぬままの旅立ちだった。享年74歳。

ご家族はもとより、当会にとってもあまりにも突然のお別れで、その無念さは言葉もない。当会のために黙々と仕事をされ、ご自身では鵠沼20世紀の記録を編年史としてまとめる計画に情熱的に取り組んでおられた。

生前、吉田さんと近しかった方々から追悼の文を寄せていただいた。ここに追悼特集を組み吉田さんのご冥福を祈るとともに、「鵠沼を語る会」としても吉田さんの数々のご尽力に、あらためて深い感謝の念を捧げたい。

吉田興一氏

大正13年1月19日、東京・麹町の生まれ。
父は旧陸士卒の技術将校（少将）で、飛行機搭載用機銃や小銃の設計・製造を専門とし、後に小倉陸軍造兵廠長を務めた。父の転任に従って旧制小倉中学から旧制旅順工科大学予科、同大工学部冶金科に進んだ。学部1年の時に終戦、父親が亡くなっていたため鵠沼の親戚のもとへ引き揚げ、以来、藤沢に住んだ。

大学への復学はあきらめ昭和25年、公募制となった第1回公務員採用試験を受け、藤沢市役所に入庁した。学校教育課、藤沢市中央図書館、社会教育課などを経て、昭和51年7月から同57年1月まで鵠沼公民館館長を務めた。

「鵠沼を語る会」は吉田さんの館長就任とほぼ同時に発足しており、以来22年間、陰に陽に会の世話をいただいた。会誌『鵠沼』の編集も、長期間、ほとんど独りで担当、『鵠沼（合本・第1集）』（1996年10月）の発刊にも中心的な役割を果たされた。



忘れてはいけない吉田さんの功績

「鵜沼を語る会」会長 高木 和男

吉田さんが亡くなられたことを突然に知って、驚いてしまいました。この3月の例会には元気で出席され、これからの仕事の計画などについて明るく発言されていました。その姿はいまだに目に残っています。「20世紀の鵜沼」を、編年史としてまとめたいというのがその計画のひとつで、早くも歴史年表の一部の制作に取りかかっておられました。

私はこの会に参加してまだ新しく、会の歴史についてくわしくは存じませんが、会長という立場に置かれて以来、吉田さんにはとりわけお世話になりました。

吉田さんは大正13年（1924）の東京生まれで、陸軍技術将校であられた父上に従って小学校5年のときから小倉へ移られて、戦争中は満州の旅順工科大学におられて終戦を迎えられました。内地へ引き揚げ、鵜沼にご親戚があったことがご縁で鵜沼海岸に住まわれるようになりました。

鵜沼公民館は鵜沼海岸の南部と西部の町会が資金を寄付して昭和34年に現在のところに建てられ、同56年に今の規模に改築されました。吉田さんは昭和51年7月21日に館長に就任され、57年1月10日まで務められています。

「鵜沼を語る会」の会誌第1号は昭和51年7月31日の発行となっていて、前公民館長として高松敏夫氏の文章が載っています。これから推察すると「鵜沼を語る会」は高松館長の終わりに生まれ、吉田新館長に引き継がれたもののように思われます。それゆえ吉田さんは「鵜沼を語る会」に当初からご縁があったことになります。

吉田さんはそれ以降、長い間この会の世話をされました。初代の会長は伊藤昌昌さんで、いろいろ鵜沼の歴史について調べられ、諸名士に鵜沼を語らせて会誌『鵜沼』をにぎわしています。2代目会長は伊藤節堂さんで、歴史の研究に詳しく会誌『鵜沼』は毎回、実のある記事で満たされていました。伊藤節堂さんがやめられた後、吉田さんは会の建て直しをはかられ、今に至っているわけです。

以上のことは吉田さんの功績の一部に過ぎないと思いますが、「鵜沼を語る会」の発足から建て直しまで吉田さんの功績は忘れてはいけないものであるこ

とは確かです。ご冥福をお祈りいたします。

吉田興一さんと鵠沼

「藤沢地名の会」会長 湯山 学

「藤沢地名の会」が10周年を迎え、今後の新しい活動計画として市内の各地区で古老からその土地の古いくらしや伝承・しきたりなどの話を聞く「藤沢を語る会」をつくるにあたって、どこからはじめるかについて最初に鵠沼が候補にありました。鵠沼には「鵠沼を語る会」が長年にわたり活動されていることがその大きな理由でした。そこで地名の会の会員でもある川上恵久さんにご相談しました。

実際に向けての具体的な打ち合わせを鵠沼公民館で行うことになり、当日公民館に赴いた際、吉田さんに久しぶりにお会いしました。そこで吉田さんが会の事務局長としてお世話しているとお話でした。「鵠沼を語る会」は10数年ごろ前、地名の会会、長久保尚雄さんも会員として参加されていましたが、私も当時鵠沼公民館館長であった吉田さんから時々会誌『鵠沼』をいただいていた。私は吉田さんが館長をやめられたあと当会との関係をつづけられておられたことを存知あげませんでした。この日お会いしたとき「鵠沼を語る会」を吉田さんは単に公民館長の職務としてお世話していたのではなく、個人的にもこの会の活動に情熱的に取り組まれていることを知って感激しました。

さらにこのとき参加された「地名の会」役員の関野（旧姓菅井）茂雄さんが初対面の吉田さんに「吉田さんですね」と呼び掛けられたのにまた驚きました。私は関野さんに吉田さんをご存じですかと尋ねると昔、岡田電池（のちの松下電池工業）で一緒だったということです。実は私の旧制小田原中学校の同級生が同工場に勤務していたこともあり、こうした奇遇に驚きました。

吉田さんは昭和25年、地方自治法・地方公務員法の制定で、公務員の採用が公募とされた第1回の採用試験で藤沢市役所へ就職された。このとき多くの職員が採用されたのはシャープ勧告で地方自治体が地方税を独自に賦課・徴収する権限を与えられ、その事務処理に必要となったからである。多くの新採用職員は税務部門に配属となった。私もその翌年採用されて同じ税務部門に配置となった。吉田さんとはそれ以来の長いお付き合いです。

その吉田さんから満州の大学（正確には旅順工科大）で学んだとお聞きした

ことがある。そして父上が軍の将官で九州小倉の陸軍工廠の長官であったこともその後なにかの折りにお聞きした。当時、吉田さんは鵜沼海岸駅の近くに住んでおられ、ご自宅にもお邪魔して、お元気でいられたお母様にもお会いしたことが思い出される。先日、奥様にお聞きしたのは、父上は昭和18年にお亡くなりになり、母上の姉が住んでいた前記の鵜沼に住むようになったとのことでした。

その後、お互いに市役所のいろいろな部門に異動となり、ふたたびご一緒することになったのが、昭和47年私が藤沢市中央図書館へ異動となったときでした。この年革新市政を唱えて当選した葉山峻市長は図書館の改革を目指し、新しい方針を打ち出すため先進地の図書館関係者の有識者に諮問をしているところでした。吉田さんはその事務方としてその衝にあたっていたのです。いまままで運営して来た方向を変えるということには内部でも抵抗があるものです。教育委員会から辞令を受けるとき、上司からこの改革がスムーズに行くようにしてあるからと内々にいわれたが、私には一体何のことか分からなかった。着任して吉田さんからいままでの経過を聞くなかで、その意味するところを理解することができました。

お陰様でこの改革を契機に図書館の運営に新しい方向が打ち出され、いまや全国的にも有数の図書館に成長するようになった。その後、吉田さんも私も図書館を離れ、吉田さんは鵜沼公民館の館長になられた。鵜沼は吉田さんにとって昭和18年に居を構えられた故郷として最適な職場であったことを先の「鵜沼を語る会」でのご活躍ぶりからあらためて感じた次第です。

先日、吉田さんのご仏前にお参りさせていただいた折り、奥様から吉田さんが生前に使っていたワープロのことでご相談があり、機種が富士通のためここしばらく使っていなかったのであまりお役にたたず失礼しましたが、フロッピーの中身を拝見したところご自身の思い出などとともに鵜沼に関する覚書が幾つかあり、吉田さんが熱心に鵜沼のことを調べておられることをさらにあらためて知りました。

突然のご訃報で十分なお別れを交わす機会がなかったことが極めて残念でなりません。幸いこのたび吉田さんを偲んで特集が企画され、会員でもない私が生前の吉田さんとのご交誼の縁で一文を寄せるようお誘いをいただき、まことに拙い文章をも顧みずここに吉田さんの思い出として寄稿させていただきますし

た。

今も耳に残る吉田さんの声

「鵠沼を語る会」会員 田 中 まさ子

この度、吉田様の追悼文を書くにあたりまして、私はまだ頭が変で、しっかり考えられません。文字も書けません。いままでは吉田さんにお電話して「原稿できました」とホイとばかり送っておりました。それに答えてくださる電話のお声……。

春も過ぎ、夏も過ぎ、秋になりましたのに「まだ待っていますよ。続きをお書きなさい。あなたにしか書けませんよ」とおっしゃる声が耳に残り、今も忘れることはできません。

なにか書こうと思いますのに、切なくて書くことができないのです。

吉田さん、ごめんなさい。こんなにお疲れになっていらっしゃったとは夢にも知らず、本当にごめんなさい。

乱筆ですみません。もう書けません。失礼をお許しく下さいませ。

忘れられない吉田さんとの会話

「鵠沼を語る会」会員 有 田 裕 一

吉田さんの訃報を聞いた時は、最初、我が耳を疑いました。大きなショックでした。この前の例会でお会いしたばかりなのに……。

「鵠沼を語る会」発足当時からのただ一人の方であるばかりでなく、会の庶務、交渉、記録など内部の仕事をほとんど背負われ、会をまとめてこられました。この熱意には頭の下がる思いでした。

会の方向づけもきちんとして下さいました。まだまだ教えていただき、ご相談したいことがたくさんありました。

会では10数年ご一緒いたしました、その間、私は根本的には同意見でありながら、吉田さんに会の運営や表現の方法などについて、私の思うことを言わせていただきました。子供が親にだだをこねるように困らせたこともあったと思います。これにも吉田さんはやさしく受け止めて下さいました。もっともっと長く会の仕事を一緒にしようございました。

いま私の頭に浮かぶ吉田さんの姿があります。それは『合本鵠沼』の配布先

を決める時のことです。発行部数がまだ不確定な時期で、多くの要望があり、意見も分かれました。一般の方からの申し込みもありました。

寒いときで、公民館での夜の会合の後、8時過ぎに帰宅し、だいぶたってからのことです。玄関のチャイムが鳴りました。ドアを開けると、そこに吉田さんが立っておられました。

いろいろと悩まれ、その時間まで松が岡あたりを歩いておられたのです。そこは終戦後の一時期、吉田さんが住んでおられたところでした。なつかしさもおありだったのでしょう。ご遠慮されるまま寒い玄関に座り、お茶をすすりながらいろいろお話ししたことを、いまとてもなつかしく思い出します。

本当にありがとうございました。

吉田さんの亡き後、会の運営には分からないことが続出すると思います。でも吉田さんの遺志を継ぎ、がんばっていきたいと思います。

あまりにも急な悲しい衝撃

「鵠沼を語る会」会員 野口 ゆくえ

私が吉田さんに初めてお目にかかったのは、鵠沼公民館の館長時代のことです。はるか20年も前になります。夫が生まれ育ったこの鵠沼に住み始めた年の秋、公民館の講座「婦人学級」の受講生になりました。早くに結婚し、3人の子どもの母親になり専業主婦だった私は、再び、そしてしばらくぶりに自分自身のために学ぼうれしさに浸りながら軽やかにペダルをふんで公民館に向かったのを思い出します。

新鮮な充実感を胸に抱いて通った旧公民館はうっそうとした緑の中にありました。「婦人学級」を終了して、サークル交歓誌『しおさい』の編集メンバーにとお誘いを受けて、その編集会議で吉田館長とご一緒したときは本鵠沼の畑の中にあった仮庁舎でした。そして縁あって図書室の司書として働き始めた公民館は明るくモダンでありながら落ち着いた風貌の現在の建物です。新鵠沼公民館の誕生のときの館長であり公民館の建設のためにも尽力され、愛着ひとしおでいらっしやっただと思います。

藤沢市民になって私が興奮したのは、この市の社会教育の素晴らしさでした。後から知ったことですが、藤沢市は全国のなかでも社会教育の先進都市であり、鵠沼公民館はその旗手であったのです。私はその恩恵をたっぷりと享受させて

いただきました。その時から私は鵜沼公民館という生涯教育の生徒になり吉田さんは恩師であられました。

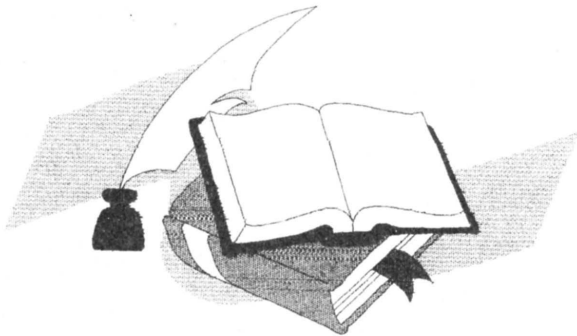
公職を退いて、吉田さんが熱意を注いでいらした「鵜沼を語る会」に入会するきっかけになったのは、この地域の歴史的なことへの関心と夫が育ち暮らしている土地のことを知りたいという願望からでした。私にとっては「語る会」ではなくて、みなさんからの話を「聞く会」です。受け身の参加であり、仕事をしながらの会員ですので定例会にも欠席することが多くここでも不肖な生徒でした。しかし、吉田さんは根気よく接してくださいました。欠席したときは会報誌をポストに届けて、折々には「こんなことが決まりましたよ」と事細かに電話で連絡をいただきました。おかげで怠け者であきらめの早いこの生徒が中退せずに今まで会員でいられたのです。

黙々と仕事をこなしていらっしゃる姿の吉田さんが脳裏に刻まれています。元館長で公民館、藤沢市、社会教育の事情に精通していらしたので、すべてのことに頼りきっていました。そして、すべてのことを丁寧に、細かに進行なさいました。定例会、『鵜沼』の編集、公民館祭りの展示、いつもいつも準備万端に整えて、会のために尽くしていらっしゃいました。

ある時、生意気な生徒が思い余ってたずねました。「どうして会長になっていただけないのですか……」

唐突な言葉に困った表情をなさって照れくさそうに笑われました。

吉田さんがお亡くなりになったという知らせは私にとってあまりにも急で、悲しい打撃でした。もう少し時間をいただけたなら、非力な私にも何かお役に立てたかもしれないと、今も、繰り返し寂しい気持ちが沸き上がっています。



中屋という旅館について

鈴木三男吉（会員・文責）
有田 裕一（会員・協力）

かつて鵜沼に一時期、あの有名な東屋と並んで、しかもそのすぐ近くに、中屋という旅館のあったことは、ほとんど知られていない。あるいは、そのことを知っている人はほとんどいなくなった、といったほうが適切かもしれない。

横浜で生まれ鵜沼で育った作家今井達夫は、慶応の予科に在学していた頃（大正九年）の思い出として、「鵜沼にいた文人」（報知新聞、昭和10年2月14日から18日）のなかで、つぎのように書いている。すでにいろいろなところに引用されている文章であるが、中屋という旅館の名が出てくる唯一の鵜沼文壇物語として読んでいただきたい。

「……………海岸で遊び飽きると、玉座に伺ってみようじゃないか、と久米さん（久米正雄）が言い出した。行こう！国木田は昂然と肩を聳やかせて叫んだ。もっとも彼が昂然とするには理由があつて、それはあとで書くが、玉座というのは、当時大変な勢いでそれに酔って『帝王者』とかなんとかいう本を出したばかりの島田清次郎の住居のことだった。とにかく当時の鼻息きたら恐れ入るばかりのもので、たぶん久米さんも辟易していたのだろう。

中村（武羅夫）さんを誘ったが、苦笑しながら首を振ったので、僕達は中屋という旅館の離れの玉座を訪れたが、残念なことには、雨戸がぴたり閉まっていて、在否のほどがわからない。島田君！ 先生！ 清次郎さん！などと女のつくり声までして呼んだが、答えはなかった。吉屋邸かな？ そういつて久米さんは本館の三階を仰いだが、玄関で訊いてみると女史も東京へ行って留守とのことだった。女史とはいうまでもなく当時『花物語』の吉屋信子である。……………」以下略

今井達夫は当時売り出したばかりの新進作家二人の奇妙な組合せに関心を持ったのであるが、それはそれとして私たちは、ここ以外に鵜沼文壇物語に二度と登場しない中屋という旅館に関心をもったのである。

しかしその一方で地元では、中屋というのは田中という人の別荘で、大正から昭和の初めにかけて鵜沼海岸一帯にたくさんの土地や貸家をもっていたことが広

く知られている。たとえば、奥田操という人が昭和9年鵜沼木下別荘に出養生に赴いたときの随想を『鵜沼海岸』（昭和12年、有斐閣）として一冊の本に纏めているが、その中に、銭湯で聞いた話として、ここでは田中耕太郎という人が貸家を五十軒ももち、所得税を一番多く払っている、と書いている。また日の出橋の向こう側にあった通信学校、そして現在の鵜沼小学校の敷地などもかつては中屋の所有地であったといわれている。

大正末期といっても海岸寄り一帯はまだ人家も少なく、砂丘の点在する砂原を主とした荒蕪地で、土地取引も反当たりの単価から漸く坪当たりになつた時代である。こういう時代に、土地を買い取りある程度の宅地化を行って貸家や貸別荘を五十軒もつくることは一つの開発事業であり、鵜沼の歴史のなかに何らかの記録があるはずである。しかし藤沢市史の底本といわれ、藤沢の歴史研究にとって欠くことのできない史料である加藤徳右衛門『現在の藤沢』（昭和八年刊、その後昭和五十五年『藤沢郷土誌』として再刊）には鵜沼別荘地の開発の経緯が簡単に述べられているが、中屋の名は全く出てこない。わずかに中屋の所有者と思われる田中耕太郎の名前が、数多い別荘地のなかの一つ、「鵜沼海浜別荘地」の所有者としてあげられているにすぎない。しかしまた次のような一文もみられる。

「……………偶々伊東将行氏は東家を起こし、田中耕太郎氏は対江館を興し、其の発展に努力す。爾来この海岸に近き土地は一反金一円を以て売買され尚且つ売り手は欣然たりしもの、以て其の土地が砂漠然たるものにして農産上収益皆無なりしを知らる。而して其の風光に富み気候は冬暖夏涼に恵まれたる勝地たるに都人士の食指は動き、土地の売買は各所に行はる。時に鵜沼対江館の閉止さるれば伊東独り東家に抛りて東奔西走寝食を忘れて此等土地の売買と総ての施設に熱誠を注がれ、今日の隆盛を為しめた功労や多しとすべきもの、云々……………」。

鵜沼に明治時代につくられた旅館として一般に鵜沼館、東屋、明治館（創設順）の三つがあげられているが、この『現在の藤沢』に出てくる対江館については、現在ほとんど知られていない。私たちの関心はこの対江館にも向けられた。

まず、中屋と関係があると思われる田中耕太郎とはどういう人なのか？ ところがこの人の名前が、戦後文部大臣や最高裁長官を歴任した東大法学部教授田中耕太郎と同姓同名であるため問題は少なからず混乱したし、また現在の鵜沼海岸



田中耕太郎



田中 カネ

四丁目付近の片瀬から日の出橋に向かう道路沿いにあった田中耕太郎の別荘の近くに、赤い塀で囲まれた地元では「赤別荘」と呼ばれる別荘があり、この持ち主もまた田中というひとであったため、さらに問題が複雑になったようである。この点についてはあとで触れることにする。

奥田氏の『鵠沼海岸』に述べられているように、田中耕太郎が鵠沼一番の多額納税者ならば必ず「人名録」に掲載されているに違いない。図書館で戦前の人名録を調べてみたところ、予想どおり二人の田中耕太郎が並んでいる。この一人が鵠沼に関係のある田中耕太郎であることは明らかである。

田中耕太郎 田安商店社長、地主、(綜) 2074、四谷区北伊賀町四、電話 四谷三八三八、〔閲歴〕本府安の長男、明治十五年八月五日生、早大修行後米国ブラウン大学卒業、昭和九年父業継承、(中略) 母かね(文久元年)、妻とめ(明治二十五年)、長男耕一(大正五年)、二男耕二(大正十二年) 慶大在学中、五女俊子(大正十四年)、六女英子(昭和四年)、そして他家に嫁した息女として長女元子(大正元年)は大村孝に、二女喜久子(大正三年)は西田貞一へ…………… 以下略

と家族関係が詳しく述べられている。「本府安の長男」とは、東京府出身の田中安の長男ということである。したがって、田中安という人も人名録に載っているはずだと調べたところ

田中 安 田中倉吉長男、嘉永四年十二月、区内有数の資産家なり、夫人かね、五男二女あり、四谷北伊賀町四

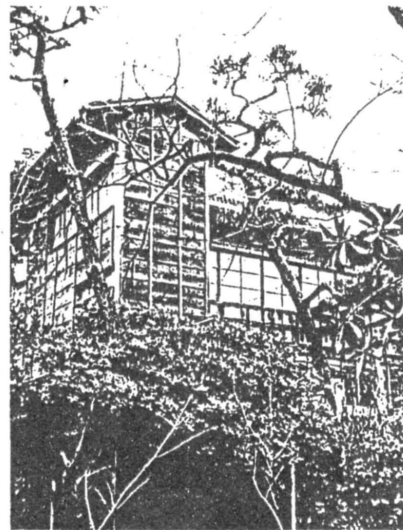
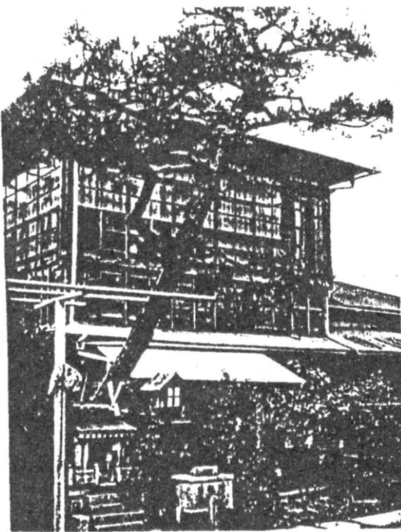
とある。田中安という名前は明治四十五年に発刊された『現在の鎌倉』（大橋良平著）の巻末についている鎌倉の別荘所有者（現在の藤沢市片瀬・鵠沼地区を含む）一覧表のなかに現れており、また賀来神社にある「鵠沼海岸別荘地開発記念碑」（大正十年十月建立）の賛助者としても名前が刻まれている。地元の古い人の中では中屋に関係のある人として知られていた。

私たちは以上、地元の伝聞と古い人名録から得た情報を予備知識として、中屋ないしは田中家と関係のある人を求め直接話を聞きたいと願った。すでに八十年も昔の事であり、時期を逸した憾みがあったが、幸い田中耕太郎の長女田中元子氏（大正元年生まれ）がまだ健在で藤沢に住んでおられることが判った。電話で来意を告げると快く承諾され、お目にかかって直接お話を聞くことができた。しかし何分にも86歳の高齢であり、そのうえ鵠沼には住んだことがなく、戦前早くに結婚して満州国に赴任してしまったということで、私たちの目的を十分果たすことはできなかった。しかし、一つの大きな収穫があった。それは、中屋旅館とは、対江館という旅館を田中家がいり取って名前を中屋に変えたということである。その時期は自分の生まれる前だからたぶん明治末年であり、対江館については、何も知らないとのことであった。その他田中家について詳しく話して下さったが、これは巻末に系譜図として掲げることにする。これによってさきに引用した『現在の藤沢』の一文「…………田中耕太郎氏は対江館を興し…………云々」の意味も判るし、また買いとった時期についても、明治43年8月に催された鵠沼懇親会寄付人名簿にも、賛助員としてはまだ対江館（井上大次郎）の名が残っているので、符節が合っている。ただ残念なことは、田中家がなぜ対江館を買いとったのか、また田中家と鵠沼との関係はこれが初めてなのか、それともそれ以前からあったのかなど大切な点が解明できなかった。私たちの中屋調査もこのまま中途半端なかたちで終わるのかと少々憂鬱になっていた矢先のことである、「鵠沼を語る会」の元会長塩沢務氏の蒐められた資料を拝見する機会をえた。その中に次のような便箋一枚のメモがのこされていた。（用字仮名遣いなどすべて原文のまま）

中屋の沿口（革）

明治の古老で明治時代に当地に在住したものは殆ど生存せず、また往事を偲ぶ写真も疎開先で焼け詳細は不詳であるが、只一人開設者の四女水野好子八十八歳が古い記憶を辿り左記のような事実が判明したが若干の年月には間違いもあると思われるが不詳は不詳として先ず確実であろうと思うことについて書いておく。筆者は大正二、三年ころに〇〇祖母（下記に述べるのは筆者の祖母）に連れられて居住中屋で大正七年春まで過ごした。さて結論から述べると中屋の開設者は田中かね（兼）で夫安（あんとも称えていた）と東京四谷区北伊賀町四に居住していた。両者が次女ふみの肺結核療養のため湘南地方を物色し、明治三十年ころ藤沢（駅付近）に借家し、続いて腰越、片瀬を経て明治三十二、三年ころに鵠沼海岸に別荘として現在の鵠生園正門前の（松林空き地）佐々木氏所有の場所にあった（現鵠沼海岸2-10-9）茅葺二階建ての立派なものだった。震災で全壊し建て替え貸別荘として中屋1号と呼んでいた。ひるがえって明治三十四年二月七日同所で前記の文（ふみ）が病没した。その後筋向かいにあった旅館対江館鵠沼

以上でメモは途切れている。今となってはこのメモがつくられた経緯については知る由もないが、田中家が鵠沼に別荘をもつに至ったいきさつを物語る非常に貴重な資料であることは間違いない。私どもの推測では、田中家の四女で水野家



中屋（震災後再築したもの）

に嫁した好子氏の五、六歳から七、八歳ごろの実際に体験した記憶であると思われる。なぜならば、田中家の長男耕太郎氏の生まれたのは明治15年であり、三男の寛氏が生まれたのが明治30年で、その間に4人の子女があり、好子氏は寛氏のすぐ上の姉だからである。また田中カネを祖母としてこのメモで筆者となっている人は、水野家の長女で、田中家の次男元嗣氏が継いだ上村家の長男安一郎氏と従兄同士の結婚をした上村久枝氏ではないかと思われる。

この途切れたメモの筆者は、このあと次のように書くつもりではなかったのだろうか？

別荘の筋向かいにあった旅館「対江館」を買いとり、中屋と名づけて居を移し、祖母カネが常住し震災で倒壊するまで旅館を営んでいた。震災による再築後は旅館業を公にすることなく、療養や避暑客向けの部屋貸しをやっていたが、前述のようにこれまで自分たちの住んでいた家も建て替え、貸別荘中屋1号としてのを手始めとして、海岸地域一帯の空き地（砂山や沼沢の多い荒蕪地）を次から次へと買いとり、そこに貸家貸別荘を建て、中屋（イ）の何号、（ロ）の何号などとして、本格的に貸別荘業を始めた。

しかし私たちは、震災前に中屋から土地を買った人々を知っているし、実際に貸別荘を始めたのは震災前からだと考える。また地元の人の間には、現在の八百徳の裏にたくさんあった貸別荘のために共同の大きな井戸を掘り、櫓の上の水槽に水を汲み上げそれぞれの貸別荘に給水し、いわば手製の水道をつくったという話も残っている。

故塩沢氏の手元にあったこの貴重なメモの続きを、私たちの推測で書くことによって、中屋旅館物語はおわることになるが、田中家ならびに田中安夫妻が東京で始めた田安商店について若干触れておき、対江館とはどういう旅館であったか？ これは新しい問題として次の課題としたい。

田中安は昭和九年に亡くなり、その跡を耕太郎が継ぐことになるが、アメリカのブラウン大学に留学した氏にとって、今日でいう不動産業は決して好ましいものではなく、鵠沼における中屋の事業はもっぱら母カネの采配に委ねられていたと思われる。彼自身の別荘（鴈鵠荘と呼んだ）も漸く昭和12年につくられたといわれる。母カネも昭和16年に天寿を全うするが、その後中屋には病氣療養に来ていた次男元嗣の継いだ上村の一家がすむことになり、最終的には上村家の長男で精神科医であった安一郎氏の手によって、現在の社会福祉法人上村鵠生園となり、老人福祉に大きな貢献をすることになるのである。

また田中安・カネの始めた田安商店は、カネの千葉にある実家（山下家）の関係で当初は蠟燭の製造販売を営んでいたが、文明の進歩とともに、漸次灯油の販売を手がけるようになった。その後、田中家の末弟で横瀬家を継いだ横瀬寛の手で次第に拡充され真珠・石鹼の分野にも進出し、それぞれの会社を起こすことになったが、現在は田安商店を含めすべて株式会社田安商事の下に統括され盛業をつづけている。この横瀬寛は今日でいう優れた起業家であったように思われる。

田中家の長女、耕太郎の姉イトは、眼科医の石黒吉三郎と結婚、男子二人をもうけたが、それぞれの孫が現在鵜沼に在住しておられる。次男元嗣は上村家を継いだが、前述のようにその子息安一郎は従兄弟同士の結婚をして子供はいなかった。二女、三女は早世し、四女好子は水野家の嫁した。そして三男寛は横瀬家を継ぎその子息たちは、田安商事の経営に参加し、その娘明子は湘南高校がかつて野球で全国制覇したときの二塁手佐々木信也夫人である。

私たちが直接お話をうかがった耕太郎氏の長女田中元子は、大村家に嫁いで大村姓になったが、軍人であったご主人の遺族年金がご主人の実家の方に支払われるように、再び大村家から籍を抜いて田中家に戻ったということである。耕太郎氏の子息二人、耕一、耕二はすでに亡くなり、耕一の子息たちが現在東京に在住している。

最後に、今回の中屋旅館を調べるにさいし、藤沢市でつくった市史関係の書物を二、三読んだが、鵜沼別荘地の開発にかんして比較的重要な誤りがあるのに気づいたので、それを指摘しておきたい。こういう刊行物の誤りをそれ自体訂正することは殆ど不可能なので、この機会にその誤りを本誌の読者に知ってもらうことは、決して無意味なことではないと考えたからである。

1) 『藤沢市史』第6巻、昭和52年、525頁。

「とくに鵜沼海岸の東屋は、同地の開発を推進した伊東将行建築の旅館として田中耕太郎（田中平八、俗称「天下の糸平」の長男）の待潮館とともに知られていた。しかし、鵜沼館や対江館などは後に経営不振で閉鎖された…………」。以下略

2) 『藤沢通史（総説篇）』（藤沢市教育委員会発行、昭和36年）216頁。

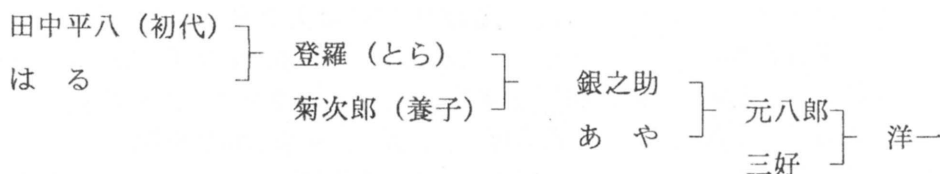
「これとは別に鵜沼を別荘地と開拓し、且つ積極的に宣伝紹介につとめた先覚者があった。地元人では川上九兵衛、三誓小三郎、移住では伊東将行（九

州藩士）・田中耕太郎（天下の糸平の男）がそれを代表しよう。これら先覚者が鵜沼の開発に乗り出したのは明治20年（1887）ころからで、川上九兵衛、三觜小三郎・伊東将行は相諮って、先ず鵜沼館を建てた。続いて田中耕太郎が対江館を建設した。ともに夏期の海水浴客を目当てにしたものであったが、伊東将行は別に東屋をおこし、四季を通じて都会人の清遊を誘致することを企図した……………」。以下略

3) 『藤沢市史料—鵜沼研究資料集—』（29）、昭和60年3月、57頁。

「……その建設（鵜沼館のこと—筆者）は明治20年頃という説が妥当のようである。鵜沼館の位置は鵜沼海岸2丁目11番地（高橋医院の地）一帯を占めていた。次いで田中平八郎によって対江館（或いは待潮館）をおこされ、伊東将行はまた別に旅館東屋を開き、ことに端なくも三者雁行して各々家業の発展を競うこととなり……………」。以下略

以上引用した記述に共通していることは、いずれも田中耕太郎を“天下の糸平”の息子としている点である。これは明らかに間違いである。天下の糸平は立志伝中の人物として昔は教科書にも登場し、また土屋喬雄の『日本資本主義発達史』（岩波文庫）には日本の豪商と謳われた人物であるが、そうかといってこの鵜沼と全く関係がないわけではない。前に述べた“赤別荘”の主こそ、天下の糸平の曾孫田中元八郎なのである。初代の田中平八には先妻、後妻があり家系は複雑であるが、元八郎は先妻はるとの間にできた一人娘登羅（とら）の系列で、系譜は次の通りである。



二代目糸平は後妻だいの間にできた長男（幼名洋之助）が名のり、登羅の婿養子菊次郎が三代目を名のった。前述『現在の鎌倉』にも別荘の持ち主として田中平八の名前が出てくるし、「鵜沼海岸開拓記念碑」の賛助者にも田中銀之助の名があげられている。田中元八郎は戦後湘南学園の理事長に就任したが間もなく在職中に死去された。

ところでこの間違いはどうして生じたのであろうか？ 念のために、かつて服部清道氏が主宰していた古い歴史をもつ「藤沢史談会」の会誌を調べたところ、『藤沢史談』第22号（昭和40年3月）に掲載されている「鵠沼海岸の開発」（服部清道）のなかに次のような記述がある。

「それと同じころ（武相クラブをつくったところ）、田中耕太郎（田中平八、俗称「天下の糸平」の長男）は待潮館を起こして、伊東等と雁行して鵠沼海岸の開発に努力した（待潮館は、一書には対江館とも記された中屋の通称あり、現田中邸の地にあり）。風俗画報（明治二十八年八月刊、九十七号）に「鵠沼海岸海水浴場、藤沢停留所を距る南半里許、江ノ島を距る十二町許にて鵠沼館、待潮館等の旅館ありと記されているのは、そのころのことである。……」

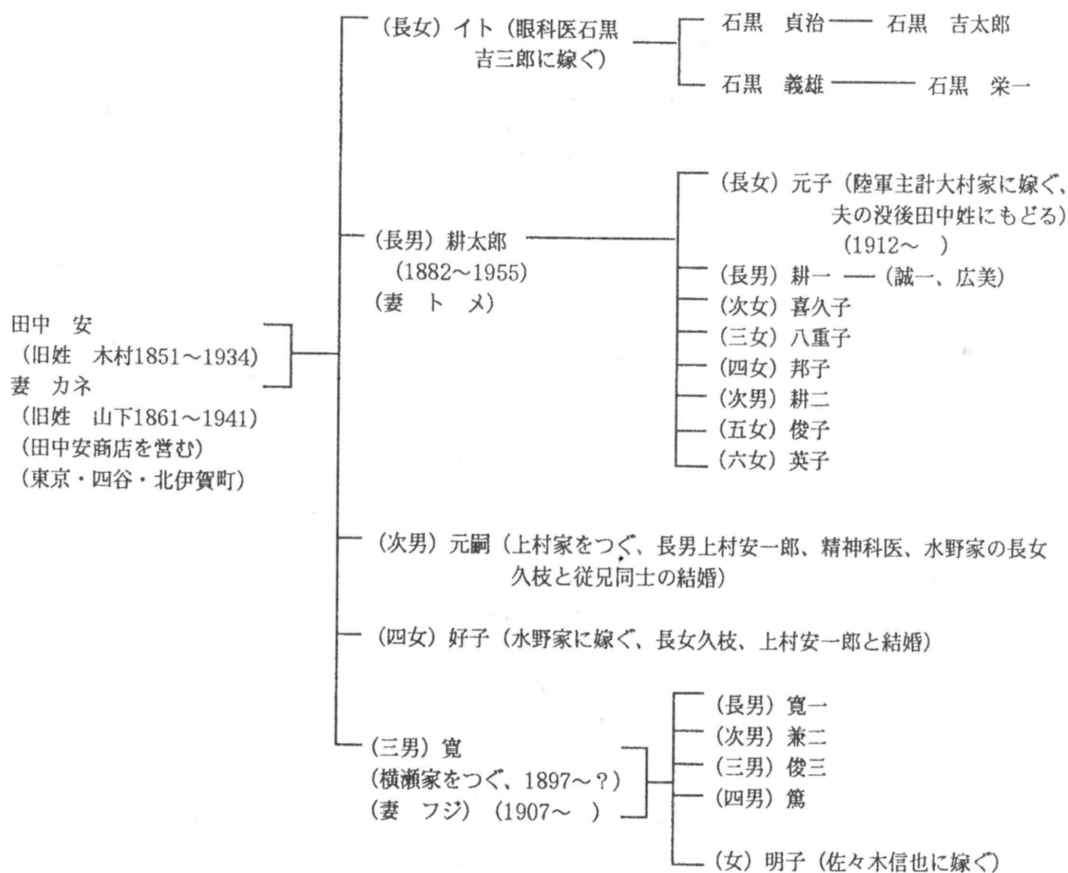
やはり同じような記述である。どこかで誤ったのがそのまま受け継がれてきたのであろう。市史の底本『現在の藤沢』には前述のとおり田中耕太郎の名前は出てくるが、どういう人であるかの説明はない。おそらく「藤沢市史」編纂にさいしての誤りだと考えられる。同姓であり、別荘も現在の海岸通りの海側に近接して建っていたことが混乱のもとであろうが（別掲の地図参照）、中屋＝田中家が鵠沼海岸の大きな地主・家主であるにもかかわらず、中心的な人物（田中安→田中耕太郎）が常住していなかったため、直接話を聞く機会が少なく、憶測が憶測を生んだことが大きな原因と思われる。

〔注記〕

- 1) 田中家の人々の履歴を調べた人名録は『昭和人名辞典』第一巻（東京篇、1987、日本図書センター発行、底本は『大衆人事録』第14版、昭和17年、帝国秘密探偵社発行。及び『明治人名辞典』上巻、1987、日本図書センター発行、底本は、『現代人名辞典』第2版、大正元年、中央通信社発行。
- 2) 故塩沢氏の資料のなかに、内藤千代子の友人、上原綾子が『女学世界』（明治四十三年八月一日発行）に書いた「鵠沼海岸半日の清遊」という一文がある、これはその夏、鵠沼に住んでいた内藤千代子の家に招かれたときの随想であるが、その中に、「あの評判の＜松風＞の舞台、対江館……」というくだりがある。対江館の解決の手がかりになればと願っている。
- 3) 文中の写真中、田中耕太郎、田中かね氏のはそれぞれ田中元子、三浦登美子両氏のご好意によるものであり、中屋のは塩沢氏の資料中にあったものを使わせていただいた。

今回の調査に際し多くの方々のお世話になった。とりわけ会員の有田氏には、いろいろの教示をえたばかりではなく、中屋関係の方々を紹介していただき直接お話を聞く機会をえた。有田氏をはじめそれらの方々はこの誌上を借りて厚くお礼を申し上げたい。また偶然とはいえ、故塩沢氏の苦心して蒐められた資料を無断で利用させていただく結果となったが、ほかならぬ「鵠沼を語る会」のためであるし、きっとお許し下さるものと信じている。なお文中の方々の敬称を省略させていただいた、あしからずご了承願いたい。

参考 田中家の系図



かつて鵠沼海岸にあった中屋の所有地

この地図は関係者の方々の話を総合してつくったもので、必ずしも正確とはいえないが、その位置と広さを示す意味で大きな間違いはないと思う。

中屋の所有地

- ①中屋旅館
- ②東屋旅館
- ③田中耕太郎別荘
- ④田中元八郎別荘（赤別荘）



鵠沼の歴史的家をたずねて②

続 劉生の住んだ別荘

— 『松本陽松園』の記録

西 忠保 有田 裕一 高三 啓輔

(いずれも「鵠沼を語る会」会員)

岸田劉生が住んだ松本陽松園（松本別荘、現在の地番では鵠沼松が岡4-7-10）のおおまかな全体像に関しては、本誌76号（平成10・3月発行）に述べた。その後の調べで、松本陽松園の経営者が、日本橋で太物（綿・麻織物）問屋を営んでいた松本直祐という人であると思われることも分かった。今号では劉生が住んだ貸別荘の間取りについて述べたい。

劉生の娘麗子はその著書『父 岸田劉生』（雪華社、昭和37年刊）に間取りに関する文章をかなり詳しく書いている。その文章は前号に引用した。したがって重複を避ける意味で麗子の文章の再掲はさけるが、その文章を基に作図したのが次ページの推定間取り図である。

この推定間取り図については、麗子の次女である画家・岸田夏子さんと、劉生の『村娘図』のモデル川戸（旧姓葉山）マツさんにも見てもらった。

マツさんは、現在、藤沢市藤沢の長男宅でそのご家族とともに暮らしておられる。平成10年9月で86歳になられた。まだまだお元気で、生き生きとした目の光は、劉生が『村娘図』に描いた当時のものとほとんど変わらない。

この4月には山梨にある岸田夏子さんのアトリエを訪れて、夏子さんにとっては母であり、マツさんにとっては幼友達である「麗子」の思い出話などを久しぶりに交わしてこられた。マツさんは、いまでは鵠沼時代の劉生を直接に知る唯一の人になってしまった。

今回の推定間取り図の不正確なところも、マツさんの記憶によって正すことができたのである。マツさんが、いまもなおこうして元気でいてくださることを、ほんとうにありがたいことだと思う。

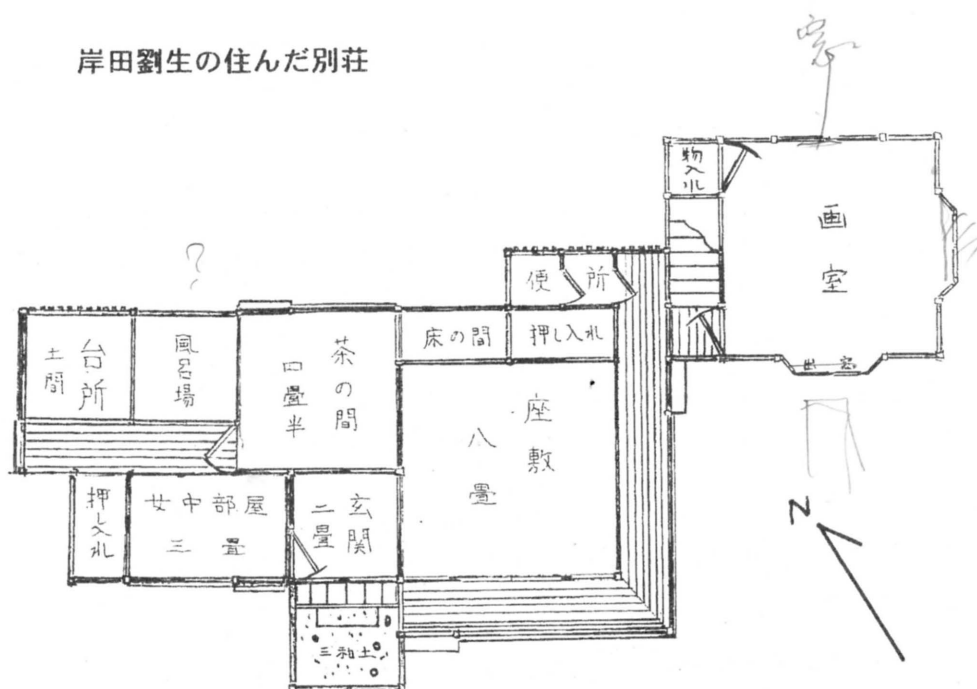
この間取り図に関する夏子さん、マツさんお2人の意見は後に述べることにするが、この間取り図に見られる家こそが、劉生の生涯を通じて最も充実した

時期といわれる「鵠沼時代」の活動の舞台となる場所なのである。図の右方にある画室（一階）から『麗子像』『村娘図』などの名作が次々に生まれていった。劉生の住んだ家の間取り図がこのような形で公にされるのは、今回が初めてのことである。

この貸別荘の家賃は、夏冬変わらずひと月10円（公務員の給与を基準に現在の貨幣価値に直すとほぼ二万五千円程度か）であった。建坪30坪足らずの家ではあるが、現在の常識からいえばむろん破格に安い。現在の土地と家屋の値段がいかに異常に高騰したかという証拠にもなるだろう。

推定間取り図を見てみよう。

岸田劉生の住んだ別荘



この見取り図の無断複写および使用を禁じます。

図の南西に向いた玄関を入るとすぐ右手に回廊状のお縁があって、それは8畳の座敷を巡るようにして北東側で行き止まりになっている。その突き当たった右手に画室へ入るドアがあった。この画室の部分だけがいわゆる洋風建築になっていて、鵜沼では当時、唯一の二階建て洋館といわれた。二階が畳敷き、一階がリノリュームを敷いた洋間で、劉生はこの一階をアトリエにし二階を書斎にあてた。外光を調節するため、南東と南西側の窓を布でふさぎ、室内には北光線だけを取り入れた。

玄関の三和土から式台にあがるとすぐに2畳の玄関の間、その左が3畳の女中部屋である。玄関を真っすぐに進めば4畳半の茶の間、茶の間の左奥に風呂場、台所が続いている。

最初、われわれは3畳の女中部屋が茶の間に隣接するものとして推定していた。実は、岸田夏子さんにはこの最初の推定に基づいた間取り図をお見せしたのだった。

この時、夏子さんは「大まかなところで、母・麗子の書いた文章を再現していると思われる」といわれたが、同時にひとつの疑問点を指摘されたのである。それは女中部屋が茶の間につながる構造になっていた場合、女中さんはどういう経路で便所に行ったのだろうかということであった。その鋭い指摘は、われわれにとっても大きな疑問となった。確かにこの場合、女中さんは茶の間を突き抜け、玄関の間を経ても縁に至るというコースをとることになる。

いちいち茶の間を抜けてお手洗いに行く女中さんがあるだろうか。またそのような構造の家をわざわざ造る大工がいるだろうか。この疑問を抱えたまま、川戸マツさんのところへ伺ったのである。推定図を見るなり、マツさんは考え込んでしまった。



間取り図を確認する『村娘』のモデル川戸マツさん。

「女中部屋はこんなところでしたかしら」。

(平成10年9月、藤沢の自宅で)

そうつぶやいて、何度も図面上の女中部屋を指でさしているのである。マツさんは、2 畳の玄関の間に麗子とともに寝たこともあったという。その話をした直後、マツさんは

「女中部屋は、玄関の間につながっていました」

と断言したのである。確かにこの構造であれば女中さんは玄関の間に出るだけで、手洗いへ行けることになる。

また、われわれが書いた推定図では、風呂場、台所が西北の角で飛び出す形になっていたが、それもマツさんを考えこませる原因になっていた。

「お風呂場や台所はこんなに飛び出してはいなかった」

と何度もいう。

確かに女中部屋を玄関の間に隣接させると、風呂場、台所は飛び出ることなく茶の間の壁面と一直線上に収まり、マツさんの記憶と一致した。

女中部屋に関して、夏子さんの疑問とマツさんの記憶は、見事に同じところを衝いていたことになる。

※

松本陽松園の中にあった貸別荘について、補足しておかなければならない。別荘入り口から一番左奥の家についてである。

この家は、関東大震災後に建て変えられたが、以降、ほとんどそのままの形を保って現在に至っている。

この家には、昭和26年以来、法政大学社会学部長を務めた故逸見^{へんみ}重雄さんが住んだ。マルクス経済学者として多くの後進を育てた逸見さんの家には、引きも切らず若い学生たちが訪れた。学生たちは、このさして広くもない家を^{とうこうしゃ}「韜光舎」と呼んで、慕った。鵜沼は学者が多く住んだという歴史をもつが、松本陽松園もその一端を担っていたのである。

逸見重雄さんはすでに亡いが、北海道の出身。旧制三高から東京大学経済学部へ入った。経済学を選んだ理由は河上肇『貧乏物語』の影響だったと自著『道標』（「逸見先生を囲む会」発行）に書いてある。大学二年の時、これも河上肇を慕って京都大学経済学部へ転学した。その矢先の大正15年1月、京都大学など全国の社会科学研究会系の学生がいっせいに検挙されるという事件が起きた。いわゆる「京都学連事件」と呼ばれるもので、治安維持法が初めて適

用された思想弾圧事件だった。逸見さんはこれに連座、大学は途中で退学となった。

戦後、法政大学社会学部長に迎えられ、昭和26年から松本陽松園に住んだ。

そのいきさつを逸見さんは、先の『道標』に次のように記している。

「ここ（引用者注、松本陽松園のこと）へ落着いたのは17年前で、家屋だけは、高校時代の友人の援助で買ったが、土地は地主との訴訟を経、大学の住宅資金を借用して、8カ年の月賦払いでやっと手に入れたのである。戦前は貸し別荘で、今では鵜沼でも最古の建物の一つになっている。土地の広さは、札幌のわが家の庭の三十分の一にも満たないし、家屋建坪も二十分の一にも及ばない小住宅である。毎年修理に修理を重ねて辛うじて崩壊を免れてきた貧弱な家屋なのである。」

逸見さんはこの家の玄関から入った正面の壁に「韜光舎」と大書した額を掲げた。父譲りの額だったが、逸見さんの自宅を訪れる教え子たちはこの額から逸見さんの家を韜光舎と呼ぶようになったのだった。

逸見さんはさらに次のようにも書いている。

「私はこれ以上移転しようとは思っていない。この地は、親友野呂栄太郎が病を養いながら理論闘争をつづけた土地であり、野呂の紹介で妻千鶴子を知り、やがて二人が結ばれた土地でもある。（妻は、この地で女学校と女子大を過ごした）」

逸見さんの「韜光舎」は関東大震災後に建てられたもので、逸見さんが「今では鵜沼でも最古の建物の一つ」と書かれている通り、鵜沼界限では大正期の面影を残す数少ない家のひとつであることには間違いない。

逸見さんの家は、現在、千鶴子夫人が独りで守っておられる。千鶴子夫人の記憶では、この松本陽松園の一番奥、つまり逸見さんの家のすぐ隣の小高い丘の上の家には、鵜沼に住む有名な外人の一人であったステンベルヒが、一時住んでいたという。

テオドール・ステンベルヒはユダヤ人で、スイス・ローザンヌ大学から東京大学へ招聘されて教えていた。ドイツに妻と息子を残していたが、ナチスが政権を握っていたドイツには帰れず、長い間、鵜沼に住んだ。最終的には辻堂に家を持ち、軽井沢にも山荘を持っていたらしいが、いつまで日本にいたのか、

その詳細は分からない。

高瀬通りを造った高瀬弥一も東大でステンベルヒの講義を聴いたことがある
そうで、弥一の娘である笑子さん（米ミネソタ大名誉教授、歌人。在米）の著
書『鵠沼断想』（初出『わが住む里』）にそう書いてある。笑子さんもまた娘
時代、ステンベルヒにドイツ語を教わるため、夜道を歩いて辻堂の家まで通っ
たことがあるという。

ステンベルヒは鵠沼の商店街でも人気者で、「ステルン」「ステルン」と呼
ばれていた。「ステルン、古くなったな」といわれると「あまり古くてくず屋
も買わない」と応じていたということも、笑子さんは書かれている。

平成10年の現在、松本陽松園の跡地はすっかり様変わりしてしまった。

先にも述べたように、逸見さんの家に当時の面影をわずかに見いだすだけで
ある。劉生の住んだ後に造られた赤いレンガ塀も、つい最近、造成のために跡
形もなくつぶされてしまった。劉生の住んだ跡に、藤沢の文化的な記念の場所
として案内板の一つも立てておきたいと願うのは、われわれだけであろうか。

（松本陽松園の項おわり）

私ども「鵠沼を語る会」では、愛惜は禁じえません。
「鵠沼の歴史的家屋の記録」に取り 鵠沼の歴史としてせめて映像、図面に
組んでいます。別荘地鵠沼の特徴 残して留めたいと考えた次第です。
としてあった大正、**鵠沼の歴史的家屋** 手初めとして「松
昭和初期の大別荘、**記録へのご協力を** 本別荘」の記録に
貸別荘も、急速に とりかかっており
その姿を消しつつあります。時代 ますが、その他にもこれはと思われる建築
流れとしていたしかたないことと 物、建造物があれば当会までお知らせく
は思いつつも、古きよき鵠沼への ださい。よろしくお願いいたします。

講演記録 「鵠沼に住んだ人たち

～郵便・電報を配達した日々～

講師 渋谷 良之

講演日 1998年6月23日

会場 鵠沼公民館

司会 本日は昔の鵠沼について、渋谷良之さんにお話を伺います。渋谷さんにはこの会として2～3年前に一度お話を伺ったことがありますので皆様よくご存知の事と思いますが、簡単に略歴をご紹介します。

渋谷さんは大正3年にお生れになって、昭和10年に藤沢の郵便局にお入りになり、昭和40年までお勤めになりました。その間ずっと藤沢市西俣野にお住まいで、当初の昭和10年から2～3年間は主に郵便や電報を配達するというお仕事に携わられましたところから、この鵠沼地区に非常にお詳しい方でいらっしゃると思います。特にその時分の街並とかそこに住んでいられた方々のエピソードなど聞かせていただけることと思います。最初に「鵠沼を語る会」の高木和男会長から一言お願いいたします。

高木会長 司会の方が言われたように、3年ほど前にもお話を伺ったことがあります。そのお話は会誌の「鵠沼」74号にもその抄録が載っておりますので読まれた方もあると思います。今日はまたもっと詳しくいろいろなお話を伺うということになると思いますが、鵠沼の居住者について非常に詳しく知っていらっしゃる方なのでその点で興味あるお話が伺えると思っています。簡単ですがご挨拶に代えさせていただきます。

渋谷 ご紹介いただきました渋谷でございます。先ほど高木会長よりのご紹介にもありましたが、藤沢市の西俣野に住んでおります。この地は八百年から九百年の歴史を有する地であります。平安・鎌倉時代は記録としてはあまり残っておりません。とはいえ若干の記録は残っておりまして、私も小さい時から郷土史には興味を持って、親や祖父に教わるなどしてまいりました。

昭和8～9年頃不況のどん底の時、家は農業と養鶏業をやっておりましたが、こ

れは他にも仕事を持った方がよいということで昭和10年に郵便局に入りました。当時の給料というのは事務員を選ぶと1日にたった50銭しかくれなかった。ところが郵便の配達夫ということになると1日に1円だったのです。1日1円、1ヶ月30円あればおコメが5俵買えるじゃないか、これは百姓やるよりこの方がいいということで郵便局を選びました。そして郵便の「集配員」という辞令を戴いて、昭和15年まで郵便、電報の配達、貯金、簡易保険の集金、これらを混合で携わってきたわけです。

昭和10年当時は本鵠沼駅から鵠沼海岸までにはたった210戸しか定住者はいらっしゃらなかったんです。そのうちで別荘、当時は新しく出来る家は全部別荘と呼んでおりました。

先ほども昭和10年頃には210戸ほどしかなかったと申し上げましたが、別荘と申し上げても家作ですね、貸し家はかなりありました。これらは7月8月以外は全部空き家で、普段は鵠沼の集落の人たちが管理をしておりました。ことに鵠沼海岸では「植文（うえぶん）」「植定（うえさだ）」それから「植高（うえたか）」こういった人達が別荘の管理をし、時々戸を開け、風を入れしていたようなわけです。

ここにおられる高木和男さん（「語る会」会長）などは当時ここにすでにおられて私は氏のご両親の時代から知っておりました。

鵠沼は明治の始めに山崎由さんという方、後には俳優の佐分利信がこの方の家作におられましたが、この方は鵠沼海岸、当時下岡といっていましたそこに、おそらく東京の方から移られて第一番に家を出されました。その方に当時話を伺うと「なんたってさみしいところだった。俺の家がここに建ったころにはまわりに狐がいただよ」などとおっしゃっていました。明治の始めと言いますと、大給さんがまだ賀来神社をこちらにお建てになっていないころと思います。山崎さんは「そのころから見るとずいぶん変わったなあ」と私にいろいろお話下さったわけです。

昔は郵便を配達しているとどこのお家についても番地と戸主名を知らなくてはいけないのです。今はどこの家にもだいたいポストがあってそれにポンポン入れて行きますけれども、これだと名前以外覚えられない。当時はポストなどありませんから、全部玄関や台所から配達しておりました。ことに鵠沼と辻堂海岸というところは書留郵便が多いところでした。書留郵便というのはいちいち判子を貰わなければなりません。それと裁判所などからの内容証明、これは地主の方などが相いらいらっしゃって、配達の日時まで指定されている、こういうものも扱っておりま

した。ですからここに住んでいる家の人とは大体全部面識がありまして、これは今の郵便屋さんとは若干違うところです。それで今でも「ああ、あの人はこういう性格の人だったなあ」と存じているところです。

それから戦争がひどくなり、東京や横浜に空襲の恐れが出てくる頃になりますと、疎開と称してこちらにお住まいを移された方があって、それから急激に鵠沼海岸が戸数が増えて来ました。当時の面影は私なりに記憶していますが、最近あまりにも変わってしましまして少々戸惑うわけです。

壬申の地租改正、明治5年ですね、それ以前は小字（これにつきましては何らかの名前を付けて呼んではいいたわけですが）や番地、坪数別こういったものは全然なかったわけです。壬申の改正の時に当時の名主（関西地方では庄屋といっていますが）これが村長になったわけです。西俣野では渋谷九兵衛、私の所が副をやっていまして、羽鳥が三觜八郎右衛門さんというのは分かっていますが鵠沼が誰だったか残念ながら分かっておりません。この村長が明治6年ですか戸籍法が公布されました時に陣頭指揮に立って戸籍簿を作ったものなのです。そしてこの人達が、今は測量と言いますが当時は「縄入れ」と申しまして縄を持って測ってそれで坪数を出してそれが明治9年の壬申地券ですね、これが制定されまして現在の権利書に変わっていったわけです。先程も申したとおり鵠沼の名主が当時誰だったのかは分かっておりませんが唯今調べておるところです。

今では新地番表示になっていますが、これは私にとっては残念なことで、当時明治5年に制定されましたこの地名こそは永久に残すべきだと思っています。当時の地番はその字によって番地が構成されており、引地の一番から何番まで、それから次は長塚、最後は下藤ヶ谷の7414番が最後の番地となっていました。引地の一番というのは今の東海道の引地橋あそこから始まって、ぐるりと廻って今の片瀬との境にあるポンプ場のところ7414番で終わっていたわけです。

昔は年貢が物納でしたが、鵠沼というところは農作物の収穫が殆ど無いためここは二束三文の土地でした。鵠沼の集落というのは今の海岸7丁目松岡さんの先の山口紋蔵さん、山崎宣一さんの所まででそこが本村の最後でした。そのほかの鵠沼海岸地区はほとんど明治の末まで家がありませんでした。

司会 渋谷さんが配達されていた頃は歩いてされていたのですか。

渋谷 自転車でした。ところが自転車といっても、自転車に乗れる道がいくらもなかったのです。この辺はみな砂道だったのです。それから一本通りあたりは全部沼

だったのです。それから松島苑というのがありまして、山口通りのところですが、全部砂で自転車をかつがなければ歩けなかった。当時私も若くて数えの22歳でしたから、自転車をかついで歩いて廻ったところがいくらでもありました。そのころ年を取った郵便屋さんは全部歩いて廻っていたものです。鶴沼地区は橋通りからこっちは小田急の向こう側とこちら側をたった二人で担当していましたが、当時の戸数は210戸ほどなのでこれで十分でした。ところが郵便物の数は多く、そのころでも一軒あたり5通や6通は普通でした。書留便なども1通や2通はあって、いやでもその家の人と接触することになりました。特に大曲の沼間さんという家などは年賀郵便が目方で一貫五百ありました。何通あったかということですが、当時は目方で言っていたものですから分かりませんがこれが藤沢局のトップでした。沼間敏郎さんは東京で何かの間屋をされていたようです。

司会 沼間さんは与謝野さん（晶子）がいつぺんお泊りになった別荘を持っていたそうですが。

渋谷 あそこは犬を十数匹飼っていらして、ちょっと中には入れないような家でしたが、私は入らなくては仕事になりません。私はいつもポケットにビスケットを入れておいてそれをやると皆おとなしくなってしまう。ですから私が行きますと10頭も20頭もまわりに寄ってきて犬にも大分かわいがられたものでした。後にその家の敷地内に長谷川巳之吉さんや嵯峨美智子さんが住まわれました。嵯峨さんは山田五十鈴の娘ですが若い頃は大変きれいな人でした。

司会 それで郵便物は毎日配達されていたのですか。

渋谷 当時は3人の交代制でしたので一ヶ月に10回くらいは来ておりました。

司会 時間はどうでしたか。

渋谷 時間は8時から大体11時頃で終わりです。終わるとこんどは家に帰って自分の仕事が出来たのです。さきほども申したとおり給料は当時の労働者としてはいい方だった（日給1円20銭くらい）ので、まあ百姓をやらなくてもよいくらいでした。

司会 郵便局からの給料というのはその日給だけですか。

渋谷 日給としてはそのとおりです。それから貯金の募集や簡易保険の歩合金です。留守居は奥様方が主にしておられたので、「今度こんなものが出ましたけれど」とお薦めすると「じゃ、入れてちょうだい」というようなことが多かったのです。担当の100軒のうち60軒ほどがこうした貯金や保険に加入されていて、おかげで時には給料よりも手当が多い時もありました。

司会 当時貯金の一番多かった方はどなたでしたか。

渋谷 そうですね、鵠沼ではさっきお話ししました昔四つ角と言っていた大曲の沼間さんとかあいう方でしょうか。

大曲という地名は通称なのですが、あの道は片瀬の川袋から中藤ヶ谷を通して、松島苑のところ上藤ヶ谷から下藤ヶ谷そして海岸に抜ける唯一の道路でした。その通りには渡辺實さんという方がいて、今多分その家は文化財に指定されていると思います。それから井上正良さんが角にあり、その邸内に駐在さんがありました。近くに馬越さんのお宅、そして芳藤苑がありました。

今「天金通り」と呼んでいる所は昔「東仲通り」と言っていました。それから海岸通り、熊倉通り、一本通りは昭和になって小田急が開通して一本さんが町長になってからのものです。古い通りは堀川通り、本村から一本松の踏切を通して抜けてくる道が葉山さんの四つ角、ここには火の見櫓がありましてそこを境に海岸方面を堀川通りと言いました。

作橋のところは葉山前市長のおじいさんが開墾された田圃でしたが関東大震災の折田圃が全滅してしまいました。その地所を横浜の平沼覚治郎さんが手に入れて再開発されました。作橋という名は辻堂小学校のほうに蛇行していた引地川を葉山又兵衛さんたちがまっすぐに付け替えたのですが、そうすると川向こうに旧鵠沼の農地が残りました。鵠沼のかたが向こうへ耕作に行くのに渡る橋ということで作橋と名付けられました。

太平橋の方は、昭和9年に当時の町長の大野守衛と地主の平沼覚治郎両方の名前を取って太平（おおひら）橋となりました。今では「たいへいばし」と言っていますが。この橋の左側に明治館、これは明治31年頃に川上九兵衛さんがお建てになったもので、当時の政治家で当時の自由党の三土忠造さんなどと親しく、これで辻堂海岸の開発が進みました。川上さんは多分辻堂の相沢製作所の相沢さんにご親戚か何かでその関係であそこを相沢さんにお譲りになったのではないかと思います。一度震災でつぶれて、その後子息の相沢峰松さんが管理されていました。ですから私たちは相沢さんの所を「明治館」と呼び習わしており、事実郵便物も明治館宛で来ておりました。昭和15年頃までこう呼んでおりました。この相沢峰松さんのお父さんは「相沢兼松翁」と言われていまして、鵠沼の関根から出られたようですがその関根さんがどこの関根さんかは分かりませんが、私は菊田の関根さんではないかと思っています。そこから相沢家に婿養子で入られて非常に辛抱心の強い方だったそうです。土木の請け負いをやっておられました。

その関東大震災の話をしますと、私が震災最後1週間か2週間ほどしまして親父と鵜沼に参りました時、その惨状は大変なものでした。海岸通りの家などは全部倒壊してしまっていました。また阪神大震災でも見られたような液状化現象も起こり有田さんのところなども井戸も庭も真ったいらになってしまいました。海岸通りでも1メートル近い津波に襲われました。公民館の先の吉村鉄之助さんの別荘、ここには東久邇宮妃殿下が皇子3人をお連れになって避暑に來られていました。第二皇子が下敷きになられたのですが、かけつけた消防団の人達も宮様がおられるということで近寄りがたくしているところ、前沢清さんが皇子達をお助けしたそうです。前沢さんは第一皇子のお誕生日に吉村家の法被を着て毎年ご挨拶に行かれました。あの時前沢さんが東久邇宮家から戴いた便箋に書かれた感謝状を見せてもらった事があるのですが、宮家から戴いた感謝状が便箋に手書きというのは不思議で「なんとかならなかったのか」と尋ねたところ「あの時はとっさの場合で、宮家とはいえ全て失っておられたので『これで勘弁してください』と執事に言われた」ということでした。昭和12年に前沢さんからその感謝状を見せてもらいました。ちょうど妃殿下が鵜沼に來られていた時で私もお目に掛かることができました。その感謝状ですが、こう言うてはなんですが非常にお粗末なものでした。今も息子さんか誰かがお持ちになっていればよろしいのですが、。。

司会 何か他にエピソードみたいなものはありますか。

渋谷 そうですね、これは大分後のこと昭和15年頃の話になります。当時沼間別荘と言っていました、そのあたりに寺門忠さん、この方は昭和14年頃橋通りの郵便局を建てられてその局長になられた方ですが、その方が今の広田弘毅さんの家の横手に住んでおられました。その寺門さんが「何か変なものが出る」当時すでに荒れていた小田柿別荘を見ていましたら、その変なものは貉（むじな）でした。狸とはよく似ていますが貉が小田柿さんがお作りになった池のわきの洞穴でつがいと捕まりまして、しばらく飼っておられました。「おい、渋谷さん、貉が出たよ。見ていけよ」などとおっしゃて、見せて貰ったことがありました。「ここらはへびやカエルがいるから餌には困らないが、冬場の餌は困っちゃうなあ」などと言って大変面白い方でした。

高木 野兎は当時は随分おりました。

有田（会員） 狸は今でも菊本別荘に出て来るそうです。リスもいるそうです。

渋谷 その菊本さんと渡辺さんの間の奥が一時久邇宮の別邸なんです。終戦間近に

久邇殿下宮が大日本海軍航空隊司令官になられ、今の藤沢の聖園学園のあるところ、グリーンハウスに執務しておられました。

有田 菊本邸は昭和30年頃東急が分譲しまして、その時立派な建物があつたそうです。それが多分その旧久邇宮邸だったのでしょう。その建物、洋館だつたそうですが、五島慶太氏がどこかのゴルフ場のクラブハウスか目黒の雅叙園だかに移築したと聞いたことがあります。

渋谷 わたしはそこで久邇宮総司令官にお会いしたことがあります。この久邇宮というのは今の皇太后の叔父に当たります。

今の皇后、美智子様も疎開されて一時白百合学園に通われたことがありましたので、私が皇居へ参りました時に、皇后様が「私も藤沢にいたことがある。大変懐かしい」とおっしゃられたのを直に承りました。そう思うと鵠沼は皇族ともかなりゆかりのあるところですよ。

有田 美智子妃殿下は井上邸の隣、日清製粉の寮があつたところに疎開されていたことがあります。

渋谷 橋通りには直径4メートルもあるような石、「橋通りの大石」と呼ばれるものがあります。あれは鵠沼に持ってくる途中で動かなくなりあそこに置かれたそうです。

有田 あれは鵠沼海岸3丁目の西村さんに持って行くつもりだつたんじゃないでしょうか。

渋谷 西村さんというのはアメリカの横断鉄道敷設に携わつた方です。

司会 先程も話に出ましたが、鵠沼では非常に古い方、山崎由さんの話を聞かせて下さい。

渋谷 何年ころでしたが、俳優の佐分利信がこの山崎さんの家作におられました。8畳に3畳か4畳半の小さい家で、今の天金の裏手に当たります。おそらく明治の初年に山崎さんが掘つ建て小屋を建てた時分はまわりには何も無く、狐は出るイタチは出る、いやなところだつた、とよく言われていました。この人は亡くなるまでゴミの収集をされていました。鵠沼の人は此の方より後から来た人ばかりと言ってもよいくらいです。

昭和15年頃は魚林のところから湧き水がこんこんと湧き出していました。それが当時石橋だつた藤ヶ谷橋から相馬孝太郎さんの所を通つて幅2メートル深さ1メートルくらいの堀になって境川に流れ込んでいました。

渋谷 村川堅太郎さんのところにも配達に行きました。村川堅太郎さんはよくお庭に出られて桃畑の手入れなどをやられていました。あそこには村川さんと宇野哲人さん、藤吉さんと3軒しか家がなくなっても静かなところでした。村川さんの前は堀が流れていて、この堀は今JRと小田急線が交差しているところ、新田（しんでん）と言いますがそこから今の堀南から小田急に沿って沼のような所を通って、村川さんのところで川のようになり、今の高根のバス停のところから引地川へと抜けていました。

西（会員） 中川家の前、今の鵠沼海岸7丁目にオランダ公使館かどこかに務めていた外国人が住んでいたと記憶しておりますが、なにかご存知ではありませんか。

渋谷 あのあたりは戦争中は大変だったです。特高というのですかお巡りさんがしょっちゅう私服でうろうろして、やっぱり外国人はスパイの嫌疑を掛けられていたのです。その周辺には5、6軒そういうお家がありました。公使館、大使館に勤められる方の別荘で、ソ連の方もイギリスもドイツの方などもおられました。昭和10年前後のことです。日支事変の頃からはどんどんうるさくなって来て、子供の出入りまでチェックされるような具合でだんだん居辛くなってきてついになくなりました。外国の子供さんがチャンバラごっこで遊んでいた姿を思い出します。

西 フォードでしたか自動車があり、箱根まで日帰りのドライブにうちの祖父と祖母が連れて行って貰ってよろこんで帰ってきたのを覚えています。

竹縄（会員） 東屋が厚木の航空隊の将校クラブになっていたということについてご存じないでしょうか。

渋谷 東屋は昭和14年に廃業しているし、私は昭和20年頃はすでに配達をしていないのでよく分かりませんが長谷川欽一さんが個人的にそういうことをされていたのかもしれない。

高木 それは新東屋のほうではないのでしょうか。

右近（伊東将行の孫、伊東将治氏の兄である右近一夫氏の夫人）軍人さんが集ってどうこうという話は知りませんが、当時の東屋では広田弘毅さんが若い人を集めてお話をしていたと聞いています。

寺田（会員） 聖園のところにあった航空隊の将校の集会所は旧東屋の敷地にあった古い二階家にありました。東屋は戦後米軍に接收されたのではありませんか。

右近 東屋は接收はされませんでした。国分さんのところは接收されていました。

渋谷 当時鵠沼には岸本海軍中将、後藤陸軍大佐、大谷少将、吉武少将このかたは

閑院宮のお付き武官でした、それから牧野少将こういった方がいらっしゃいましたが、みんな周辺は刑事で固めておりました。特に終戦間近になると久邇宮殿下が海軍の総司令官で藤沢の航空隊にいらっしゃいまして別荘が藤ヶ谷にありました。こういったことから警備と防諜関係が軍の方から厳しくなりました。ですからそういった方のお住まいはあまり公表されていなかったようです。しかし私共は仕事柄そういうことを知っていたわけです。

司会 今「語る会」では鶴沼の別荘の問題に関心を持っておりまして、いろいろな別荘のことを調査し始めているわけですが、渋谷さんが現実に藤沢郵便局にいらっしゃった時期の著名な別荘の名前とか、別荘にお住まいになっていた方々の主だったお名前などご記憶されている範囲内でお教えいただきたいと思います。

渋谷 お住まいが東京にあってこちらに常時でなくときたまお休みとか避暑とかにおいでになる方これを私共郵便屋は「別荘」と呼んでいました。まず下藤ヶ谷から申しますと、鈴木別荘（徳力別荘）、三輪梅三郎さん、三輪徳寛さん、赤星五郎さん、赤星さんは大磯のバラ園を経営されていた方です。玉井儀助さん、後藤覚治さん、渡辺實さん、菊本別荘、小田柿さん、そのそばに磯崎功さんそれから広田弘毅さんももとは別荘でした。広田さんのところはいつも私服が5、6人もうろうろしていましたが、私としてはどうって言うことはありませんでした。それから益田別荘、これは今の熊沢屋さんのすぐ前、そして海岸方面に久松伯爵、ひげをたくわえた立派な親父さんでした。それから高木さんのところに入って内藤さん、そして後藤さん、この方は帝国興信所をされていましたが、今の帝国データバンクです。大曲の線路沿いの後藤たまさん、今の今泉さんの隣に白川清子という美しい奥さんがいらっしゃいました。それから穴山別荘や国分別荘、吉村別荘の隣には川崎さんという方がいらっしゃいました。

内藤千代子さんが昔いらした家というのは無人荘の裏側の小さい掘っ建て小屋みたいなところでした。

司会 先程渋谷さんのお話の中で書留郵便が非常に多かったということですがこれについてご説明下さい。

渋谷 これは多分別荘には作家が多かったので原稿料とかも多かったようです。書留というのは現金書留と為替と内容証明郵便などがありますが、こちらに静養にいらっしやていかたへの本宅からの送金もあったと思います。当時は為替は藤沢の

本局で手続きをしなければならないのです。ですから現金書留が多かったのです。郵便屋は抜き取られたりしないように注意したものでした。海岸から本鵠沼、辻堂東海岸、日の出橋のところは郵便物も多ければ書留郵便も多いところでした。

内容証明は地主なども多かったので訴訟関係のものも多かったようです。秋田の郵便局長をされた方で八幡三次郎という人がおりまして、内容証明に対して「郵便屋、俺はこんなものは取らん」と言うので「取らんと言ってもこれは内容証明なので、おたくは郵便局長をされていてそんなことをご存じないはずがないでしょう。取らなきゃ取らんでその理由を書いてください」と申し上げると「くでえなあ」と怒るんです。奥様が「郵便屋さんにそんな事を言ってもいいのですか」とおっしゃられたのですが、結局一度持ち帰りました。それでももう一度行くと「やあ、すまん、すまん。押してやるから勘弁しろよ」とこんなことがありました。それから八幡さんとはすっかり仲良くなってしまうしました。そしてわざわざ藤沢局まで「自分がその仕事にいて百も承知しているのに申し訳ない」とお詫びに来られたものでした。

今の六会地区、昭和15年までは六会村でしたが、あそこあたりには現金書留などは一年のうち何通もありませんでした。それに比べるとここの多さは今考えると本宅からのご送金だったなと理解できます。

司会 さきほど鵠沼の所帯数を210戸とおっしゃいましたが、これは本村を含んでいますか。

渋谷 含んでおりません。本村は関東大震災頃から終戦頃までとほとんど出入りはありません。所帯数210戸ですが100戸くらいの空き家がありました。これは夏だけの別荘で7月の新盆から8月の旧盆までの1ヶ月くらい使用されました。ところが来て帰るのですから、郵便屋さんは大変であちこちへ付箋を付けて送り返さなくてはなりません。返送先は芝白金三光町とか都心よりも郊外が多かったようです。1軒あたり2、30通あって、これは大変な仕事でした。

司会 別荘という呼び方なんですけどこれはいつ頃から呼ばれたのでしょうか。

渋谷 昭和初年には海岸通りなどでは土地から出た人と商店を営んでおられる方以外、これを土地では「しもたや」と言っていました、大体それを別荘と呼んでいました。昭和10年頃までは別荘というのは良い名前として通用していましたが、刑務所のことを「別荘」などと呼ぶようになってしまったので、「人の家を刑務所呼ばわりは怪しからん」などと言う人もいたのです。しかし大体は鵠沼海岸に住

まっている人について、土地の人は全部「お別荘の人」と呼んでいたものでした。それでも土地の者は主に百姓で、陰では「なんだ別荘のやつらあ贅沢こいてやがって」などと言っていました。これは多少ひがみも混じっていたように思います。

それから戦争がひどくなると、こんどは疎開というかたちで東京から家族で移って来るようになりました。

高木 私は身体が弱くてこちらに住まっていたましたが、それでも家の事は別荘と呼ばれていました。別荘の人間は金持と思われていたらしくなんかの寄付の時はたくさん取られたものでした。

渋谷 こころがいかに静養地であったかというのは、有田さんの近くの浜野さん、この方は片瀬の出で牛乳屋をやられていました。牛乳屋は藤沢の金井旅館の裏の前牧場に十数頭、羽鳥の石井牧場二十数頭、片瀬の浜野牧場に二十数頭とありましたが、この牛乳が引っ張り尻でした。鵠沼には結核患者が多かったことも事実でその方達の栄養補給のため牛乳屋がはやったのです。今の西村さんのところにいた藤沢の飯塚澱粉の娘さんの飯塚里子さん、女優の村瀬幸子さんの弟で松井五郎さん、西海岸の中沢宗平さんなどは鵠沼で結核のため亡くなられています。小此木彦三郎さんはまだ十代の頃看護婦と二人で邸宅で療養されていました。

まあ鵠沼は本当に結核患者と「お妾さん」の多いところでした。

渋谷 作家の方というのは鵠沼の行政面にはほとんど関心をもたれなかったようです。私が行政面に貢献されたと思うのは町長の隈川基さん、此の方は元海軍少将で海岸の別荘誘致に非常に力を注がれました。それから元陸軍少将の一木與十郎さんです。この方々は地元ではなく遠方から来られた方で、欲のない方でした。先程の大野守衛さん、此の方も遠方の方でした。金子角之助さん、金子小一郎さんのお父さんで、代々大庭の名主の家です。

高木 金子角之助は東京螺子の松本さんと知り合いで螺子をこちらに呼んだのです。

有田 桂別荘と茂木別荘というところの位置を確認したいのですが。

渋谷 桂別荘というのは江ノ電の駅の裏手に「魚直」という魚屋がありまして、その脇を入ったところに舟板で作った堀があったところそこが桂別荘です。片瀬川のふちになります。

茂木別荘は湘南学園の一木通り、突き当たりの「立川ペニシリン」があります。その上の山室別荘、その隣が茂木別荘です。その隣が太田雄之進、その隣が佐野別

荘です。

有田 三輪徳寛さんが松島苑を開いたということですが。

渋谷 松島苑を開いたのは山口寅之輔という人です。あそこらを昭和初年には山口通りと言っていました。山口さんは植木屋さんでした。

渋谷 昭和12年頃、熊倉通りの一木さんの向こうに稲荷社をこしらえるいうことで建て前までやったのです。これは当時えらいさわぎでした。しばらくそのままで立ち腐れみたいになってしまいました。今の伏見稲荷はそれとは別に戦争中に何か道場のようなものから発展して、高山昇さんが伏見稲荷の講社として開いたものです。戦争中は人々が禪一つで海に入る行みたいなのをやったり、大物の政治家が訪れたりしていました。

有田 当時鶴沼海岸の郵便局は「無集配」と何かに書いてありましたがこれはどういうことですか。

渋谷 これは郵便出す方を受け付ける業務はするのですが、配達については藤沢局が直接行うということです。当時の局長は柿沢さんで、鶴沼郵便局で為替を現金化する資金ということで当時の金で数万円を毎日藤沢局から運んだものです。

有田 当時の電話の普及状況について教えてください。鶴沼では大正時代に40数本、昭和10年前後で120本ということになっていますが。

渋谷 当時別荘と言っても電話のある所は稀でした。

西 郵便局と電話局が分かれたのはいつ頃ですか。

渋谷 終戦後のことです。当時4局合併、そのころは電話は磁石式だったのですが、それを共電式にしようということで東京の公社に相談にいきました。そうしたら「なんだ今時共電式などにしないでダイヤル式にしたらどうだ」と即答を得ました。そこで帰ってきて鶴沼、辻堂、片瀬、藤沢の各郵便局長と協力会長やそれぞれ地元の有力者もいっしょにダイヤル式で4局合併しようという事になったのです。この合併の当時の加入電話は4局合わせても2133（うち鶴沼地区は421）でした。

司会 それでは長い事どうもありがとうございました。これにて渋谷さんのお話を終了します。

「クゲヌマエンス」と呼ばれる 小さなエビの話

伊藤 聖

(元朝日新聞科学部記者 鵜沼在住)

まだ高度成長が始まる以前の昭和 31 年 (1956 年) の夏、鵜沼海岸 3-6 の N 邸の池で発生した小さなエビの名を尋ねられたことがあった。「毎年いまごろになると、たくさん生まれるんですけど、なんというエビなのでしょうかと、その N 邸のお嬢さんから、エビの入ったビンを預かった。

当時、勤めていた平塚江南高校に持ち込み、生物学の五十嵐耕 (ゆずる) 先生にお尋ねすると「ああ、これはハウネンエビです。日本のどこの田圃にでもいますよ。これが多い年は豊年になるという言い伝えがあるので、そういう名前がついたようです」と明快な答えが返ってきた。

二、三日して、五十嵐先生が「ハウネンエビのことですが、あれにはくゲヌマエンス」という学名がついていました。命名者はイシカワとなっていますが、このイシカワというのは東大の石川千代松博士のことでしょう。石川博士が鵜沼で最初に発見されて、クゲヌマエンスという学名をつけられたのではないでしようか」といわれた。

それから間もなく、私は高校教師をやめて新聞社に入ってしまったので、五十嵐先生にお会いする機会もなく、そのうちに先生が亡くなられて、このハウネンエビのことも、忘れるとはなしに忘れていた。最近になって、N 邸が分譲され、ハウネンエビの池も埋め立てられたことを聞き、鵜沼ゆかりのエビのことを書いておこうと思った。

明治 25 年に石川博士が鵜沼で発見

ハウネンエビの学名は「*Branchinella kugenumaensis* (ISHIKAWA)」といい、石川博士が命名されたことは分かったが、最初に発表されたのが何時、何という雑誌なのか分からない。いろいろ調べた結果、慶応大学の磯野直秀教授にお尋ねして、それが百年以上も前の『動物学雑誌』第 7 巻 (1895 年) に英文で記載されていることを教えていただいた。(以下敬称略)

それによると、ハウネンエビは明治 25 年 (1892 年) 7 月から 8 月にかけて鵜沼の海岸の砂地に、雨で一時的に出来た水溜まり (small pools formed by rain

water) で、同じ仲間のミスジヒメカイエビと一緒に発見された。また同じ夏、東京の吉原田圃でもタマカイエビとともに発見されている。吉原田圃というのは、あの吉原遊廓の裏手に広がっていた田圃のことであろう。当時はまだ一面の水田だったようだ。

石川は明治 11 年、東大理学部に入學、動物学科に進學する以前から、モース博士のもとで指導をうけた。モースは大森貝塚の発見者で、江の島臨海実験所の開設でも有名であるが、東大動物学科の初代教授としてその基礎を築いた。石川が動物学科 2 年に進學した同 12 年にはモースは離日して、後任のホイットマンが第 2 代の教授になっていた。

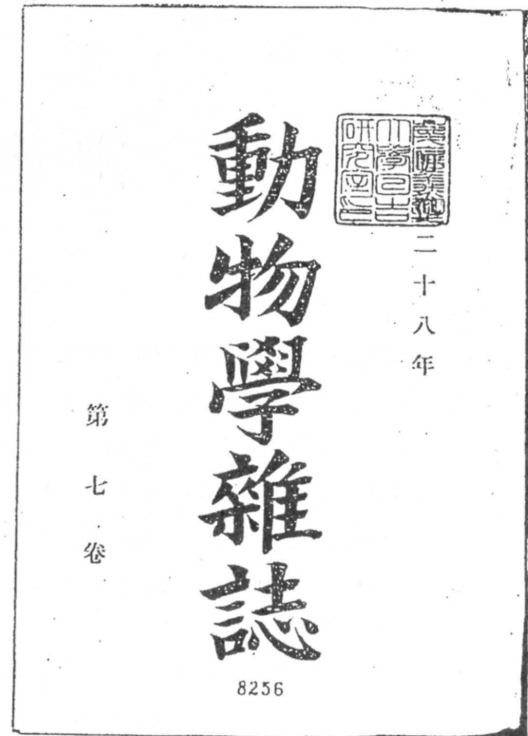
ホイットマンは石川に「沼エビの発生」を研究課題として与えたが、これは後々までも石川の専門分野となった。ホイットマンは沼エビを「シュリンプ」といい、学期末試験の忙しいときでも、顕微鏡でシュリンプをのぞいていないと機嫌が悪かったという（『石川千代松全集』第 4 巻）。

石川は明治 15 年に東大卒業、翌年に助教授になるが、同 18 年ドイツ留学、帰国した翌 23 年には東大（農科大学）の教授になった。したがってハウネンエビの発見は、その後のことであるが、ホイットマンが与えた研究テーマの延長上の仕事であることは、いうまでもない。

吉原田圃はともかく、どうして石川が鵠沼を研究フィールドにしたのか分らないが、モースゆかりの江の島に近いこともあって、この辺りのことはよく知っていたものと思われる。しかし『動物学雑誌』には、鵠沼海岸のどこでハウネンエビが採集されたのか、その正確な場所の記録はない。

エビというよりミジンコの仲間

石川が記載した学名は最初「*Branchipus Kugenumaensis*」だったが、その後「*Branchinella Kugenumaensis*」と属名が変更された。この属名変更が何時、だ

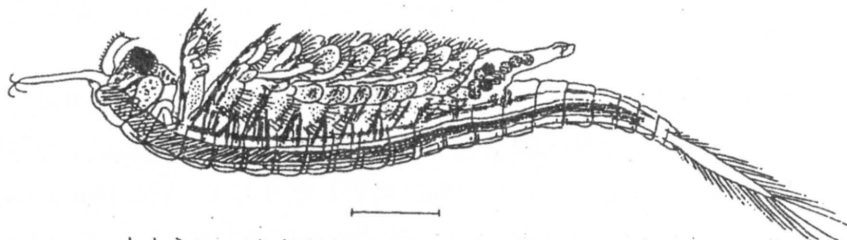


ハウネンエビの原記載がある『動物学雑誌』

れによって行われたかは、いまのところ分からない。

属名の「*Branchinella*」は「鰓脚（さいきやく）類の」という意味で、このホウネンエビが「鰓（えら）状の脚」をもっていることを示している。というより、脚のようにみえるのは実は鰓で、背を下に腹を上にして、これを動かして、呼吸しながら巧みに遊泳する。体長は2センチ前後、無色半透明であるが、ときに美しい緑色を帯びることがある。

したがって「エビ」の名はついているが、ほんとうのエビではない。なお以前は「ホウネンギョ（魚）」「ホウネンムシ（虫）」とも呼ばれていた。



ホウネンエビ（石川の原図から転載、図の下スケールは
実物の大きさ。図は約9倍に拡大してある）

『動物学雑誌』に、ホウネンエビと一緒に記載されているミスジヒメカイエビ、タマカイエビも、石川によって発見された鰓脚類であるが、ほかにも岐阜市の名和昆虫研究所の設立者、名和靖が採集して、石川が「*Estheria gifuensis*」と命名した「カイエビ」という鰓脚類がある。現在の学名は「*Caenesthriella gifuensis*(ISHIKAWA)」。一見、二枚貝のような殻で体が覆われているので「カイエビ」というが、これも最初の発見地の岐阜にちなんで「ギフエンシス」の種小名がついている。

鰓脚類にはミジンコの仲間も含まれ、卵から幼生期（ノウプリウス）、さらに成体にかけて、複雑な変態をとげるものが少なくない。また無性生殖と有性生殖を繰り返すなど、興味深い性質をもっている。ホイットマンが発生学の生きた教科書として、石川の研究課題に選んだのもうなずける。

卵が鳥の脚に着いて移動

かつての鵜沼では、500坪から1000坪程度の邸宅は普通だった。その庭には大抵、松林の隅の小暗い木陰に自然の沼があったり、池がつくられたりしていた。砂地だから水が溜まらないだろうと思われがちだが、地下水が比較的高いところまできているので、ちょっと掘ると池が出来たものである。

また砂丘と砂丘の間も割合湿っていて、その低湿地には田圃が作られたりしていた。私が住んでいる松が岡砂丘と熊倉山砂丘（と私は勝手に呼んでいるが）の間にも、大正年代までは「岡田」と呼ばれる水田があったと古老はいう。現在の鵠沼小学校の北側（鵠沼桜が岡3-14）で、小学校の建設が始まった昭和19年ごろまでは、校庭の中央に農業用排水のための水路が残っていた。いまは暗渠となっているが、セリやヨモギがたくさん生えていた。

そんな池沼や水田には生物の種類も多く、ホウネンエビ、ミスジヒメカイエビなどが棲んでいた。そして雨水で出来た小さな水溜まりにさえ、そのような小動物の姿がみられた。それも一か所でなかったことは、石川が **pools** と複数で記録している通りである。

ホウネンエビは短期間で卵から幼生を経て成体になるので、雨水で出来た水溜まりが干上がるまでに、次世代に卵を残すことが十分に可能である。その卵は乾燥に強く、風で飛ばされたり、鳥などの脚に付着したりして、別の池沼、水田に分布していく。こうして、かつては日本中の池沼や水田にホウネンエビがみられ、それが豊年のシンボルになっていたのであろう。

本当の意味での「自然公園」を

昨年、鵠沼桜が岡2-5のI氏宅の池で、奇跡的に生き延びていた「フジサワメダカ」のことが報道されたが（1997年3月22日付朝日新聞湘南版）、このメダカは境川の固有種で、絶滅したと考えられていた。I氏は40年前、自宅近くの蓮池で採ってきたものを飼育しつづけていたという。その後、江の島水族館でも繁殖に成功、現在では稚魚も増え、飼育、観察を希望する小中学校や市民にも配布されているようだ。

しかし、メダカにかぎらず、こういう生物は淡水生物全体の生態系のなかで、自然の状態で保護されるべきだろう。そのためには、引地川上流にある大庭遊水池のような、人工の手を加えない環境が必要だと思われる。そうすれば水生動物ばかりではなく、それらとともに生きるホタル、トンボの姿も見られるに違いない。その意味では、現在の蓮池公園は失格である。

長久保公園のように、花のある公園も悪くはないが、一切の人工を排した本当の意味での「自然公園」として引地川の周辺が保護され、またホウネンエビが見られるように思っている。

本 鵠 沼 駅 の こ と

ー私の鵠沼日記よりー

金 田 元 彦

(元國學院大學文学部教授・源氏物語専攻)

昭和十八年四月一日のことであった。

一台の電車が、本鵠沼駅にとまっていた。電車はなかなか動かなかった。実は、そのころから風雲急になってきた戦局に鑑み、単線運転にしたからである。小田急江ノ島線の下り線の線路はみごとに、とりのぞかれていた。藤沢から、上り線を通して、下りの電車がやってきて、上り線と交差して出発である。現在の乗降客には、全く信じられないことであるが、小田急江ノ島線の単線運転は、昭和二十三年九月十八日までつづいた。ついでにいうと、なぜ九月十八日とはっきりおぼえているかということ、私の誕生日だからである。中井貴一、うじき・つよし、ナポレオンも九月十八日である。そのころの、本鵠沼駅は、まったく、なんにもなかった。原っぱの真ん中にぼつんとたっていた。駅前交番が出来たのが昭和二十四年七月一日。当時、急行があったが、急行は、鵠沼海岸駅をとまるだけで、本鵠沼はさっさととおりこして走っていた。本鵠沼駅に急行がとまるようになったのは、小田急の『お偉いさん』が、本鵠沼駅の近所にお引越しをなさってからであると、町のうわさでは、そうなっている。戦前の小田急で、通勤されていたのは、私の恩師、辻直四郎先生である。辻先生は、チャキチャキの江戸っ子で、東京は赤坂のお生まれである。私は、随分かわいがっていただいた。これは、内緒のはなしだが、実は、私は東京大学に三回落っこってしまった。辻先生は、可哀想におおもいになったかどうか知らないが、『当研究室にとって、この男は、必要な人間である』という証明書をかいてくださって、あっさり東京大学に入学を許可してくださった。同じ年に入学を許されたのは、三笠の宮さんだけである。あんまり簡単に考えられても困るので、すこし注釈をくわえておくと、戦前、慶応大学に語学研究所があって、辻先生はそこの所長をされていた。戦前、私は、研究所の付属機関で、モンゴル語をならっていた。先生一人に、生徒一人。先生は服部四郎先生である。私がお休みすると、休講である。服部先生もそれはかなわないので、私は、月謝は慶応大学におさめ、授業は東京大学の文学

部の研究室ですということになった。戦前から戦後にかけて、五年くらいつづいたようだ。そういう実績があるので、研究生になれたのである。辻先生のほかに、小田急でごいっしょになったのは、村川堅太郎先生である。村川先生も、東京の浅草で育ちになったので、辻先生とは気分的に共通な点があったのではないかとおもわれる。私の家は、昭和十一年に、東京から引っ越してきた。村川先生は大正時代に本鵠沼に一八〇〇坪の広大な土地を買われ、そこに別荘をたてられた。先生がお住まいになったのは、昭和十二年ころからとうかがっている。家の前に小川が流れ、東屋風の門が印象的であった。いつだったか、辻先生から、村川君は、土地の青年を集めて、何か話をしているそうだと言うことをうかがったので、最近、おもいたってしらべてみた。堀川に住んでいる、大工さんの板橋さんにきいたらわかんとおもって、お尋ねしたところ、そういうことだったら、『町会長さんの八木さんがしているかもしれない』というわけで、八木さんにたずねてみた。戦前、八木さんのお父さんは、村川先生の桃畑を管理していたので、坊ちゃんの現会長もよく手伝いにいったそうだ。坊ちゃんも歴史が好きだったので、畑とか道端で、村川先生から、ローマやギリシャの話をうかがったことがあるとおっしゃっていた。

『その頃はお幾つぐらいですか』ときいたら

『多分、慶応の予科の頃じゃないですか』というお答えだった。

その後、お嬢様と電話でお話ししたところ、あの土地は、榛葉さんと、葉山峻さんのおじいさんから、お買いになったらしい。

『父のことでしたら、鵠沼海岸の楠田進さんがご存じとおもいますが……』ということだったので、楠田さんをたずねた。残念ながら、楠田さんは、戦後のお知り合いであった。けれども、昭和二十一年に企画された『湘南夏期大学』のことは、くわしくおぼえていらしかった。楠田さんが、旧制水戸高校の学生時代だったらしい。当時、第一書房の長谷川巳之吉さんと、林達夫さんの肝入りで、この大学講座は開かれた。昭和二十一年というと、終戦の翌年で、なんにもないじぶんである。村川先生のギリシャ・ローマ史。辻先生のインド文学の話、大類伸先生の考古学などであった。そのころ、芥川比呂志さんが、鵠沼海岸の葛巻さんの家にすまわれていて、この夏期講座のしんがりにチエホフの『熊』を上演してくださった。林達夫さんのことをしりたいとおもって、国立におすまいの吉川八重子（旧姓高瀬）さんに電話でおききしたところ、林達夫さんは、大正十一年頃、吉川八重子さんの伯母様と結婚されて、しばらくは高瀬家におられ、そ

の後、柳小路に所帯をおもちになり、その後、本鵠沼のちかくに引っ越されたのではないかといっておられた。

林達夫さんは、その前後に、鎌倉に出来た『鎌倉文庫』に対抗して、私の家の母屋であった藁葺きの家を多少改造して、『湘南文庫』を創立された。銀座の『たくみ』をおやりになっていた伊東さん、三輪さんなどが、発起人であった。しかし、なんとしても「武士の商法」で、2～3年で、つぶれてしまった。

戦前、戦後を通じて、本鵠沼駅でおあいしたのは、東京大学で西洋史を教えていらっしゃった、斉藤先生。『小枝チョコレート』のコマーシャルで有名だった小森和子さん。まだ、お若かったせいか、ぎんぎらぎんの厚化粧で、電車におのりになっていた。印象にのこっていたのは、小説家の邦枝完二のお嬢様。たいへんな美人だったが、後に、俳優座の木村功と結婚された。木村功といえば、黒沢明の『七人の侍』のひとりである。昭和二十三年に、お嬢様の梢さんと結婚され、鵠沼の梢さんのうちから小田急で、東宝にかよっていたらしい。のち食道ガンでなくなられてしまった。五十八歳。木村功がなくなってから、梢さんは本をだされた。『功、大好き』（講談社）『功、手紙ありがとう』（三笠書房）

本鵠沼駅は、原っぱのまんなかにはぼつんとたっていた。私の家が東京から引っ越して来たころは、降りる人も乗る人も、昼間は四～五人あればいいほうだった。戦前だったか、戦争直後だったか忘れたが、ある年の二百十日の明るる日、六畳くらいの駅舎が、風で吹き飛ばされて、ゴロンとひっくりかえていたことがあった。若い駅員が、呆然とたちつくしていた。

今から考えてみると、ウソみたいだが、駅前に養鶏場があるだけで、いまある中村屋酒店、河野材木店、番場自転車、八百広、八百林など、なにもなかった。駅の交番（が出来たのは昭和二十四年七月一日からである）もなかった。

駅の周辺は、ほとんど麦畑だった。今の鵠沼中学校のあたりから南、鵠沼海岸の駅までは、ゆるやかな起伏の点在する広々としたながめだった。鵠洋小学校などは勿論なかった。見渡す限りの麦畑と、その間に桃畑があった。雛祭りがすむと、美しい花が砂丘の起伏を彩り始め、三月のなかばには、ぼうぼうと、うす赤い花びらが、しばいの書き割りのように本鵠沼の風景に、田園風な美しさを書き加えるのが毎年のならいであった。

戦後、だいぶたってから、駅は改装された。その直後、朝、父と一緒に、本鵠沼駅から電車に乗ろうと思って、駅に向かった。改札口を父が通り越そうとした

とき、発作が起こって、父は、本鵠沼駅で倒れてしまった。脳溢血の発作であった。父は、本鵠沼駅の宿直室に、やすませてもらった。宮川医師にすぐきていただいて注射をうったが、その時は、もう昏睡状態であった。担架で家に運ばれ、翌日、朝六時に息をひきとった。享年六十九であった。当時、父は、六会中学校で、「お習字」を教えていたので、お葬式には、中学校の生徒が、大勢おくやみにきてくださった。「野の花」をつんできて、父の霊前にそなえ、みんなで校歌を合唱してくれた。そして、その秋、ある事件にまきこまれて、家にいずらくなった私の妻をタクシーにのせて、東京の実家に返した。

妻は、車の窓から、本鵠沼駅舎をじっと眺め『これが、駅をみる最後ネ……』と、ちいさな声でぽつんと、つぶやいた。1960年、安保の年の秋のことであった。

蛇 足

私の家が、どうして鵠沼に引っ越してきたかのご質問ですか。

ざっくばらんに申し上げますと、私の父は道楽者でありました。神田の呉服屋の若旦那で、みんなにちやほやされて、いい気になって遊び回っておりました。が、ある時、一人の学者に会いました。道家斎一郎という、経済学者です。商人は目先のことにとらわれて先が見えないからだめである、といわれた。それから心を入れ替えて学問をだいじにするようになりました。ひところは、専修大学の夜学に。次に日本大学の宗教学科でキリスト教の勉強をしておりました。そのうちに、東京にいと、どうしても若いときの悪い友達がさそいにくるので、それをさけたい一心で、東京を離れようという気分になったようです。幸い、鎌倉に父の兄の別荘がありましたので、そこに仮越しをして、しばらくしてから藤沢の橘通りに引っ越しをして、出入りの植木屋さんの紹介で、本鵠沼の土地を買いました。一坪一円だったときいております。当時は、一坪十五銭か二十銭ぐらいだったらしいのです。昭和十一年のことです。実は大伯父が神田の区会議長をしておりましたので、金田家は、神田に随分、土地をもっておりまして。大伯父は、神田川のほとりで、米屋をやっておりまして、関東大震災のときには米蔵を開けて、皆さんにお米をさしあげたとか、神田の小学校に寄付して六年生を伊勢神宮に参拝させるとか、多少、いいこともしたらしいのです。そんなわけで神田の土地から地代がはいってくるので、別段、あくせくはたらかなくても、細々とは生活ができたようです。ですから、藤沢に引っ越しまして、父は、働くわけ

でもなく、父は、日大に、姉は神田の共立女子専門学校に、私は、鎌倉の小学校にかよっておりました。昭和十一年といえは、「2.26」のあった年です。時局は切迫してくるし、父としても、ぶらぶらしているわけにもいかず、始めは、養鶏場をしようとおもって、小屋をたてました。何羽か鶏をかってみましたが、これは見事に失敗しました。それで、その「鶏小屋」を改装して、書道の塾を開きました。そのときのお弟子さんが、私と東京大学で一緒だった、高瀬笑子さん、前の藤沢市長の葉山峻さん、現市長の山本捷雄さんなど、随分、大勢こられました。父の曾祖父は、信州の上田藩の御祐筆だったそうで、その縁で、菩提寺は深川の「靈巖寺」。金田家の墓のすぐ近くに松平定信の墓がありますが松平定信は『有職故実』に詳しく、見るも無残に疲弊していた京都の御所の復興と造営に力をつくしたひとでありました。

編集後記

☆「鶴沼を語る会」の創立以来たえず中心的役割を果たしてこられた吉田さんが去る4月急逝されました。生前親しかった方々から追悼文をいただき、追悼号としました。改めて心からのご冥福を祈るとともに、湯山氏をはじめ追悼文をお寄せいただいた方々に厚く御礼申し上げます。

☆第74号に引き続き、戦前の鶴沼に詳しい渋谷良之氏からご自分で実際に見聞された貴重な昔話をうかがいましたので、その全文を掲載しました。これからもこのような古老の貴重なお話をできるだけ多く記録できればと願っています。

☆戦前から鶴沼に住み”鶴沼を語る”にふさわしい関歴をもたれた金田、伊藤両氏からご寄稿いただきました。会として今後とも何かとお世話になることと思いますので、よろしくお願いいたします。

☆今回は、前回の「劉生の住んだ別荘」の続編と、鶴沼の開発に大きな足跡を残されたにも拘わらず、かなり曖昧な点が残されている田中家＝中屋＝中屋旅館を取り上げてみました。成果はあまり上がらず、なお多くの疑問点が残ることになりました。本文中に書きましたように、故塩沢氏の資料中にも中屋関係のものがかなりありました。塩沢氏はもっと深く調査をすすめていらしたような気がします。

(鈴木)

関根久男(鵠沼を語る会会員)

昭和のはじめ、素朴な田畑、松林をぬって、家の前の東海道線をD51が、もくもくと黒煙を空に突き上げ、どんと居座る勇壮な姿で雪を被った富士山の方へと下って行く。このころ、小田急電鉄が相模大野駅から片瀬江の島駅に向かって延び、朝鮮から多くの労働者が人夫として動員され、突貫工事が遂行された。開通すると人、もの、海のレジャーなどが新聞、雑誌に紹介されて、鵠沼の夜明けが始まる。

海岸へ出てみると鵠沼名物ともなった文士宿割烹旅館東屋がある。そこへはかつて文士たちがやってきた。武者小路実篤、久米正雄、川端康成、広津和郎、宮本百合子、芥川龍之介らである。その中の一人里見弴の小説『潮風』は東屋が舞台となっている。『風俗画報』に描かれた東屋や周辺の風景に刺激され、東京、横浜の富裕階級や華族たちが、競って鵠沼に土地を求め、家族の保養、夏の海水浴などのために別邸を造成していった。なかには特定の婦人をそれぞれの別邸に独り住まいさせ、小田急線鵠沼海岸駅で下車して歩く紳士が、独り住まいの婦人別邸へと消えてゆく姿を見かけた。別荘には結核患者が多く住んでいた。風が吹いたとき籠を背負い、熊手を持ち松林の多い別荘地の松の葉かきにゆくと、別荘の庭先に籐椅子を持ち出し、日差しのもとに体をさらけ出していた。結核を病んでいる人なんだと、鼻をつまんで駆け抜けた。死病結核の恐怖そのものであった。



ラッパの音が聞こえる。海軍が辻堂海岸演習場へ向かって行軍して行く。「兵隊が来たぞう！」といってその後をついて行くと、銃声を響かせて兵隊が空薬莖を捨てる。われ先にと空薬莖を拾い歩く。田畑のあぜ道、松林や桃畑の中、演習場へ行くと太平洋を渡って吹いてくる初夏の潮風とヒバリの鳴き声が心に染み、時間の経つのも忘れて鵠沼の風景の中を歩き回った。

鵠沼から新しい文化や思想が芽生えんとしているところを国家権力は弾圧し、15年戦争へと突入し、敗北した。食料難、旧憲法の恐ろしさと暗黒政治を知り、新憲法を守り育て、緑と太陽と潮風に満ちた人間都市藤沢のまきづくりに力を出してゆきたい。

鵠沼を語る会例会記録

(平成10年4月～10年8月)

川上恵久記

平成10年4月例会 4月14日(火) 10時～12時

参加 17名

議題 (1) 来年度予算についての希望。 (鈴木)

会誌の製作費考慮されたい。来年度予算に希望出すようにする。

(2) 旧家の写真保存その他について。 (有田)

昨秋より始めたが、当てにしている旧家どんどん無くなり心配。

市の文書館の応援を得て市との共催を考えていたが市の予算がおりないようで難しくなる。

会の事務所を公民館内とし、語る会をもっと地域史発掘の一環として公にしたらどうか。 (鈴木) 現状では難しい。

(3) 今年の公民館祭りの展示について。 (鈴木)

鵠沼の旧家(主として別荘)の写真による展示を考えている。

今年の展示は編集委員会が主になってやってもらいたい。

(4) 総会の議題について。 (川上)

今月の22日18時より公民館で別途下打合せを行うので意見が有ったら出してもらいたい。

(5) 西俣野の渋谷氏より昔の鵠沼について話をしてもよいとの申入れについて。 (川上)

以上の件について申入れを受けることとし編集委員会が主となり、日時、内容、やり方等検討し、渋谷氏と打合せしてもらいたい。

(その他) ☆吉田興一氏の死去について。 (川上)

今月の4日に急逝されたとの連絡奥さんよりあり、6日に葬儀終了とのことであるが、この会発足以来の功労者であり、代表として榛、佐藤、有田、川上の4名、会則には無いが特例として香典1万円持参して18日にお悔やみに行くことにする。

☆矢崎政弘氏入会される。会員29名となる。

平成10年度総会 5月12日(火) 10時～12時

出席 17名

議事 別紙「第12回総会議案書」により審議され、議案書の通り可決される。

(その他) ☆故吉田興一氏にたいし香典を差し上げた件につき、会則には

慶弔費についての支出条項無いがと会計担当より発言あり、吉田氏の会発足以来の功績にたいし特例として慰労金として贈ったことにする。会計のルールを作ったかどうかとの意見がでる。

☆郷土史家渋谷氏の座談会を6月23日（火）鶴沼公民館第一学習室で10時より12時まで開催することにする。

☆前回の例会で次号会誌に吉田氏の追悼文を載せるべく高木会長にお願いしたところその文案を持ってこられ皆さんより意見を聴かれる。

☆故塩沢氏の資料を見せていただく件、佐藤さんに奥さんと日時等話し合っていたいただくことにする。

平成10年6月例会 6月9日（日）10時～12時

参加 16名 珍しく協力会員の小林先生来られる。

議題（1）公民館祭りの展示について。 （鈴木）

4月の例会で話したように鶴沼の古い別荘の写真による展示を行う。

（2）渋谷氏の座談会について。 （鈴木）

6月23日10時より12時まで第一学習室で行う。司会は高三、鈴木（三）両氏、記録は松岡氏行う。著名人がどこに住んでいたか、地図の上に表示する。謝礼として5千円西氏用意する。

質問事項各自考えて来てもらいたい。

会長より会員各位に通知を出す。

（3）史跡見学について。 （川上）

有田氏より鶴沼本村周辺、川上より高橋コレクションの提案あり、期日を含め改めて検討することにする。

（4）塩沢氏、吉田氏保存の資料について。 （川上）

会誌77号に中屋旅館（前身対江館）の写真を載せようと思うが、塩沢氏の資料の中にあるかも知れないので見たい。 （鈴木）

榛葉、佐藤、有田氏資料を見せてもらいに行くことにし、借り出しの了解を得て西氏の家で保管してもらうこととしたい。

吉田氏の資料についてはしばらく様子を見る。

（5）鶴沼の旧家の写真保存について。 （有田）

委員会を作り具体案を作る。

（その他）☆会誌「鶴沼」77号について。 （鈴木）

吉田さんの追悼号としたいので4～5人の方に寄稿願いたい。

佐藤、有田、野口、田中さんなどどうであろうか。

☆鵜沼の保存林、保存木、保存生垣のマップを作ったらどうかとの提案ある。

☆葛巻さんの家の入り口、周辺大分荒れており何とかしなければいけないのではないかと提案あり、検討することとする。

☆鈴木氏より中屋旅館、その経営者田中家について話がある。

平成10年例会 7月14日(火) 10時～12時

参加 13名

議題(1) 会誌77号の編集について。 (鈴木)

鵜沼の別荘について。岸田夏子さん、辺見さんの寄稿。渋谷氏の座談会の記録(松岡)中屋旅館について(調査中)伊藤聖氏の「鵜沼海老について」。吉田氏の追悼文。高木会長、有田、佐藤、野口、田中まさ子さんの手紙。以上を計画している。

(2) 塩沢、吉田氏保存の資料について。 (川上)

本日午後塩沢氏の資料を有田、榛葉、佐藤の3名、吉田氏の資料を鈴木(三)、高三、川上の3名がそれぞれいただきに行く。

(3) 史跡見学について。 (川上)

有田氏より鵜沼本村、中島氏より大磯、川上より横浜市立歴史博物館が提案され次回例会にて検討することにする。

(4) 10月の例会第2火曜日が公民館祭りの為使えず第1火曜日とする。

(5) 公民館祭りについて。 (鈴木)

タイトル「鵜沼と別荘」とし、当時住んでいた著名人の居住及び松本別荘等を含む貸別荘の写真、所在地を地図上に示し展示する。

編集委員会に一任する。

(6) サークル交換会の報告

☆公民館サークル交換会報告。 (永井)

7月9日に行われ、今後公民館の部屋取り申込み、取得には「団体登録カード」が必要になる。

サークルに貸出してあるロッカーの整理を行ってもらいたいと。

☆学習サークル交換会の報告。 (佐藤)

今年は学習サークル主催で公民館祭りの土曜日午前教育問題についてシンポジウムを行う予定。

(その他) ☆葛巻邸の入り口、垣根等の補修について。 (佐藤、川上)

荒れ方相当ひどく不用心でもあり、このままの状態にしておくわけにはいかず、市の文書館に葛巻文庫を寄贈した経緯もあり相談したところ文書館としては対応しかねるとの返事で、公民館のサークル「探求クラブ」に事情を話したところボランティアとして引き受けても良いとの有り難い返事をもらう。一方道路にはみ出した植木については市で処理してくれるとの話もあり、これらを含め今までの経緯もあり、佐藤さんが鶴生園、並びに本人の葛巻さんと相談することにする。

平成10年8月例会 8月11日(火) 10時～12時

参加 15名

議題(1) 会誌77号の内容について。 (鈴木)

金田元彦氏より「本鶴沼の駅」と題し寄稿あった。藤沢「地名の会長」湯山学氏(元吉田氏の上司)より追悼文をいただく。9月29日に印刷を行う。

中島氏より南図書館には61号以降の保管無いと発言あり。

(2) 公民館祭の展示について。 (鈴木)

前回の例会での内容と同じ。

8月21日に行われる公民館主催の展示の打合せに鈴木氏出席する。

(3) 史跡見学について。

10月に大磯旧安田邸公開あるのではないかと発言中島氏よりあり次回例会までに調べてくると。

実施は10月以降とする。

(4) 塩沢、吉田両氏の資料について。 (有田、川上)

塩沢氏の資料は数多く、貴重な資料も多い。借用リストを作り奥さんに渡した。有田氏アルバムの一部を持参し回覧する。

吉田氏の資料は高三氏保管している。(本日高三氏欠席)

9月の例会で夫れ夫れ両氏の資料をこの場に持ち寄り皆さんに見てもらうことにする。

塩沢氏所管のかって行った「鶴沼懷古展」の写真も借りてくる。

(その他) 古宮一郎、和子夫妻入会され、会員31名となる。

追記 高木会長例会に来られる途中公民館の前で、車を避けようとして転ばれ怪我をし例会欠席される。

『鵠沼』 第77号

平成10年9月30日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください。

編集・発行 鵠沼を語る会

藤沢市鵠沼海岸2-10-3

鵠沼公民館内

電話0466-33-2001